

## はじめに

2020年は、NHK大河ドラマ「樅の木は残った」から放映50年を迎え、また柴田外記朝意と原田甲斐宗輔が寛文事件で亡くなってから4月19日で350回忌を迎えた。柴田外記朝意公の350回忌法要が柴田家の菩提寺の大光寺で行われた。そこで本稿では、改めて郷土を振り返り柴田町の歴史文化に関わる福祉的な安寧と教育の原点を尊び、未来の世代への歴史文化の遺産を継承すべき事柄を検討しまとめたものである。仙台大学が1967年に開学して半世紀が過ぎた。船岡村、槻木村が1889年に発足して131年過ぎ、両村が1956年合併して64年過ぎたところである。合併促進協議会が組織され会長には柴田家の末裔でもある柴田倫之助しばたりのすけ氏が選出され、26人の委員とともに新町建設計画の基本方針を定め、新町名を「柴田町」とした。この名称にした理由は、「柴田」が『延喜式』『和名抄』などの古書に見える地名で、陸奥国の古くからの郡名であることと、有史以前から旧船岡領館山を根拠地とした豪族がこの地方一帯を支配し、旧藩政時代には、この地に居城を営んだ柴田氏が伊達家重臣として著名であったということである。今後さらに、自らの郷土と母校と柴田町の歴史を学び、温故知新のもとで様々な世界で活躍しうる人材が輩出していくことを願い、本書を先人に感謝を捧げ、将来の若者に捧げるものである。

著者

# 柴田町の歴史文化と教育福祉に関する研究と課題

## しばたげきとももと 柴田外記朝意350回忌を祈念して

高橋 亮 (仙台大学)

### 1.はじめに

2020年は、NHK大河ドラマ「樅の木は残った」から放映50年を迎え、また柴田外記朝意と原田甲斐宗輔が寛文事件で亡くなってから4月19日で350回忌を迎えた。そこで本稿では、改めて郷土を振り返り柴田町の歴史文化に関わる福祉的な安寧と教育の原点を尊び、未来の世代への歴史文化の遺産を継承すべき事柄を検討しまとめたものである。

### 2.柴田町とは

宮城県柴田町船岡の名称の由来を調べてみると伊達政宗<sup>だてまさむね</sup>（1567-1636）の時代に、「四保」、つまり「シノオ」から舟岡に改められた背景として、「風土記御用書出」によると伊達忠宗の命により、四保が「響悪敷・ひびきあしき」語源であり、シノオは「死のう」に通じ・・・舟岡の四保氏は「本姓」に復して柴田氏となったと誌されている（柴田町 1989：84）。一方、別の四保氏は「響」が悪いからとの理由で柴田氏となり、「シバタ」と「シノオ」がどのように結びつくのか、解明されていない。新しい村名「舟岡」の最も妥当な説として、四保山の山容があたかも舟のようであるのでついた村名と考えられている。また、四保山が六沼に囲まれた丘陵であり、その舟着場であったことにちなんだものという説もある。藩政時代は「舟岡」、1889（明治22）年の町村制施行に伴い四ヶ村合併によって誕生した「船岡村」と書き表されたことから今日の「船岡」が存在している（柴田町編さん委員会 1984；豊川 2017）。船岡の歴史は現在明らかになっているのは1200（正治2）年頃、芝田次郎が源頼家に命を受けた宮城四郎によって亡ぼされたことが「吾妻鏡」第十六巻に以下のように記されている。「正治二年十月小十三日丙申。今日。宮城四郎自奥州。歸參。去月十四日遂合戦。及晩。攻落芝田館訖。爰有可被感事。工藤小次郎行光郎從藤五郎。藤三郎兄弟。自奥州所領參向鎌倉之處。於白河關邊。御使聞可被追討芝田之由。自其所馳歸。合戦之日。廻彼館後面。射箭不知其員。中之死者十餘人。賊主退散。偏在件兩人忠節之由申之。」これを現代語に解釈すると、「正治二年十月小十三日丙申。今日、八月二十一日に出発した宮城四郎家業が奥州から帰ってきた。『先月の十四日に芝田と戦った。その夜になって芝田館を攻め落とした。そこで感激したことがある。工藤小次郎行光の家来で藤五郎・藤三郎の兄弟が奥州の領

地から鎌倉へ向かっていたが、白河の関のあたりで、幕府の使者宮城が芝田を攻めると聞き、そこから駆け戻った。戦の日に、芝田館の裏へ回って沢山の矢を射ち戦が行われた。なんとこれに当たり数人が死者となり、敵の大將芝田も引いてしまった。本当にこの両人は幕府への忠節心がある』と申した。」と紹介されている（吾妻鏡入門第十六卷）。その後の柴田城の詳細は不明とされており、戦国時代に入ると柴田郡は伊達氏の支配下に置かれている。その後、天文年間（1532-55）にかけて柴田城主は伊達氏家臣の四保但馬定朝しのほたしまじょうちようとなり、四保氏は後に柴田氏を称している。しかしながら1593（文禄2）年に柴田氏は志田郡桑折に転封となった替わりとして屋代景頼が入城した。景頼は居館を設けたが、その後の1615（元和元）年、原田宗資（1582-1623）が大坂夏の陣に従軍して多くの手柄を挙げ、同年軍功により4,000石に加増されて柴田郡船岡城主となった。その後、嫡子・雅楽（原田宗輔通称 原田甲斐はらだかい 伊達政宗の孫にあたる）が5歳の時に家跡相続を仰せ付けられた。この原田甲斐（1619-1671）が柴田町船岡を舞台に紹介された山本周五郎著作小説「樅の木は残った」である。作家山本周五郎（1903-1967）は、14歳の時に村上信著「原田甲斐」を読み「原田甲斐は悪人ではない、いつか俺はこれを小説にかく」と述べてから40年かけてこの世に紹介するに至った（秋山1979, 村上1928）<sup>註1</sup>。藩政時代、槻木地区（町北東部）は仙台藩直轄地の穀倉地帯、船岡地区（町南西部）は伊達騒動で知られている原田甲斐の城下町として栄えた。維新後、一時盛岡藩の取締地となり、その後に白石・角田・仙台県を経て宮城県に属することになった。1889（明治22）年町村制施行に伴い槻木村と船岡村になり、槻木村は1904（明治37）年に、船岡村は1941（昭和16）年に町制施行し、1947（昭和22）年の地方自治法制定後、1953（昭和28）年9月、町村合併促進法が分布され、船岡と槻木両町では1956（昭和31）年3月22日、それぞれ町議会を開き、4月1日に両町が合併して柴田町が誕生したのである。宮城県でも「宮城県町村合併促進基本計画」を作成し、新町設計の大勢を示し、合併推進に向けて動き出し県合併計画では、柴田郡を3ブロックに統合する計画を受けて柴田郡の各町村でも調査研究が実施された。その結果、船岡町と槻木町の合併に向けての動きが本格化し会長には柴田家の末裔でもある柴田倫之助しばたりんのすけ氏が選出され、26人の委員により新町建設に向けて前進した。合併促進協議会は、新町建設計画の基本方針を、「柴田町は、合併により行財政を強化しながら自治の確立を図るとともに、産業の振興を協力に推進し、商工業の発展と工場の誘致を図り、もって住民の福祉を増進し健全かつ平和にして民主的な文化新町の建設を図るものとする」と定め、新町名を「柴田町」とした。この名称にした理由は、「柴田」が『延喜式』『和名抄』などの古書に見える地名で、陸奥国の古くからの郡名であることと、有史以前から旧船岡領館山を根拠地とした豪族がこの地方一帯を支配し、旧藩政時代には、この地に居城を営

んだ柴田氏が伊達家重臣として著名であったということである。以上の理由で、柴田郡の東端、東北本線に沿う地帯で、この地域を呼称する名称は、歴史的・地理的・社会的にも『柴田町』以上に適切な名称であり、「住民一般の自然に要望するところである」として命名された。次に柴田朝意氏をはじめとする柴田家の歴史について振り返ってみたい。

### 3. 柴田外記朝意の生涯



柴田外記朝意像白鳥神社境内

柴田外記朝意は、江戸時代前期の仙台藩重臣。伊達騒動の主要人物の一人であり通称柴田外記として知られている。朝意は1609(慶長14)年、土佐国の戦国大名であった長宗我部家の旧臣・佐竹親直の二男として生まれ(幼名は輪丸)母は長宗我部元親の娘・阿古姫である。佐竹家の祖先は常陸より土佐に入ったといわれている。上ノ加江城主佐竹義秀の子で、1581(天正9)年に父が伊予で戦没、跡を継ぎ同城主となり、長宗我部元親に仕えて重用され、元親の三女・阿古姫を娶ることを許された。主家改易後も主君・長宗我部盛親に従い、1615年の大坂の陣も盛親に従い、八尾の戦いで戦死した。佐竹親直(1566(永禄9)年-1615(慶長20)年5月6日(1615年6月2日))は、戦国時代から江戸時代初期にかけての武将であり上ノ加江城主佐竹義秀の子である。佐竹家の祖先は常陸より土佐に入ったといわれている。上ノ加江城主佐竹義秀の子で、1581(天正9)年に父が伊予で戦没、跡を継ぎ同城主となり、長宗我部元親に仕えて重用され、元親の三女・阿古姫を娶ることを許された。主家改易後も主君・長宗我部盛親に従い、1615年の大坂の陣も盛親に従い、八尾の戦いで戦死した。なお、親直の子は母とともに伊達政宗に捕らえられるが、のちに仙台藩に仕え、伊達騒動の

際に原田宗輔を斬った柴田朝意である。母は長宗我部元親の娘・阿古姫。朝意の母阿古姫

(生年不詳-1653(承応2)年7月15日(1653年9月6日))は、土佐国の戦国大名・長宗我部元親の娘。長宗我部氏家臣・佐竹親直に嫁ぎ男子二人を出産している。1615(慶長20)年(1615年)の大坂の陣の際に豊臣方についた長宗我部盛親や夫に随って大坂城へ入るが、豊臣方は敗れて親直は討死し、阿古姫も大坂城が陥落した時に息子二人と共に仙台藩主・伊達政宗の兵に捕えられたが、阿古姫と息子たちは政宗の判断により助命され、阿古姫は伊達家の侍女として召抱えられ、中将と称した。阿古姫は教養豊かで弁が立ったため政宗から信頼され、晩年まで近侍を務めた。隠居後は壽院を名乗り、嗣子外記のもとで余生を送り、1653(承応2)年米谷で74歳の生涯を閉じた(法名 東泰院瑞宝妙祥親浄女)。

息子二人も小姓として取り立てられ、二男の輪丸(賀江忠次郎)はのちに重臣・四保柴田氏を継いで柴田朝意と名乗った。朝意は奉行職(他藩の家老に相当)を務め、1671(寛文11)年の伊達騒動の際に、酒井忠清邸で原田宗輔と斬り合って命を失った。この背景は以下のとおりである。朝意は騒動の審問のために、伊達宗重より早く幕府より江戸出府の命を受け、仙台より江戸に向かった。息子の宗意が同伴を願ったが、これを制した。しかし朝意は未解決の奉行誓紙問題や宗勝の悪事も証言するために宗勝や原田を糾弾する意図を固めていたのであった。同年3月7日に原田とともに老中板倉重矩邸に呼ばれ、土屋数直列座の下で1度目の審問が行われ、最初に朝意が審問されることとなった。この審問で、藩主の伊達綱基(後の綱村)への処分がないことが確定した旨の書状を、朝意は隠居の綱宗の附家老や田村家家老に送っていた。同年3月27日に当初予定の板倉邸から大老酒井忠清邸に場所を変更し、酒井忠清をはじめ老中全員と幕府大目付も列座する中で、2度目の審問が行われた。審問は1人ずつ行われ、朝意は2番目に審問が行われ、この2度目の審問中に、別室に居た原田宗輔が宗重を斬ったのを見た朝意が、蜂屋可広と共に原田を斬ったとされている。しかし、この直後に飛び込んできた酒井家の家臣が暴動を起こしたために、蜂屋と朝意は致命傷を負うこととなった。朝意は駆けつけた仙台藩医・福井玄孝や家来らに急いで自分を宇和島藩邸に搬出するように促したが間に合わずに息を引き取ったのである。実際には故人の意思を重んじて、表向きは同日夜に蜂屋と共に宇和島藩邸で死亡したことにされ、その翌日、荏原郡桐ヶ谷村の霊源寺で荼毘に付され、4月13日に遺骨が米谷へと到着し、菩提寺の大光寺に埋葬された。妙高山大光寺は、1588(天文十六)年伊具郡金山本郷の金龍山瑞雲寺の雲集全利和尚の再興とされている。柴田家の菩提寺で寺格は柴田家中の家老格とされ、知行高は1貫500文、末寺はない。大光寺には40の墓石があり、柴田家代々の名を見ることができる。その中で、柴田町史〈通史編1:659〉の南の端にあるお墓は、町内で唯一と思われる形式の墓石で、板碑型墓塔と呼ばれるものである。柴田外記朝意の嫡男・宗意の妻で、1728(享保13)年に船岡で亡くなり、館山東麓の御廟に納骨されましたが、維新後大光寺に改葬されている(柴田町編さん委員会1989)。

柴田家は、外記朝意から一宗意一宗僚一宗理一朝隆一成義一意定一親友一意利一意広一  
意成もとなり一倫りんのすけ之助まつこ一節子（伴侶：昌弘）と継承されている。歴史人物とともに歴史を継承するため  
には芸術的才能があって成立するものである。その歴史を継承するために現在仙台市の青  
葉山に建立されている偉大なる伊達政宗騎馬像を制作した芸術家が小室達である。偉大なる  
業績が継承されるためにも本稿で紹介したい。

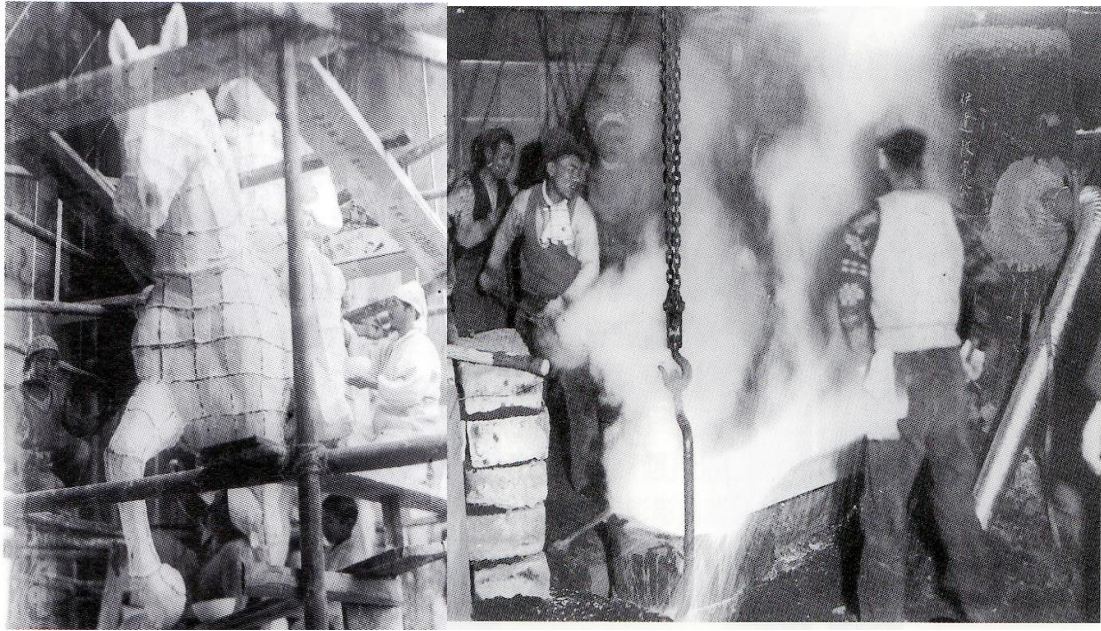
#### 4. 小室達こむろとおる 彫刻家について

小室達（1899（明治32）年8月10日-1953（昭和28）年6月18日）は、日本の彫刻家  
で宮城県柴田郡槻木村大字入間田に、小室源吾（後の槻木町長）の三男として生まれた（柴  
田町編さん委員会 1992:1182-1188）。1919（大正8）年、（旧制）白石中学校（現・宮城県  
白石高等学校）を卒業後、東京美術学校（現・東京芸術大学）彫刻科塑造部に進学し、その  
後同校を首席で卒業し、研究科に進学した。第4回帝展（帝国美術院展覧会、現日展）に初  
出品すると、第5回帝展からは無鑑査となり、27歳ながら日本美術界での地位を確立した。  
多くの業績を残したが1953（昭和28）年6月18日、肺結核のため53歳という若さで逝去  
した<sup>註2</sup>）。

伊達政宗騎馬像は1933（昭和8）年11月26日、「伊達政宗公三百年祭協賛会」が第30  
代内閣総理大臣・斎藤実（旧仙台藩・水沢伊達家の家臣の三男）を総裁として宮城県および  
仙台市の連合で結成された同年、小室は宮城県青年団から政宗の銅像制作を依頼され、1601  
（慶長6）年4月に仙台藩祖・伊達政宗が仙台城（青葉城）に入城した姿を写した「伊達政  
宗騎馬像」（伊達政宗卿像）の制作を開始した。政宗の300回忌にあたる1935（昭和10）  
年5月24日を中心に、5月20日から26日まで仙台市を中心に宮城県内各地で記念事業が  
開催されたが、この時に「伊達政宗騎馬像」も仙台城本丸に建立された。しかしながらアジ  
ア・太平洋戦争下で日本が物資不足に陥ることに伴い、国家総動員法にもとづく金属類回収  
令により1944（昭和19）年1月に供出され、仙台城から同像は姿を消したのである。

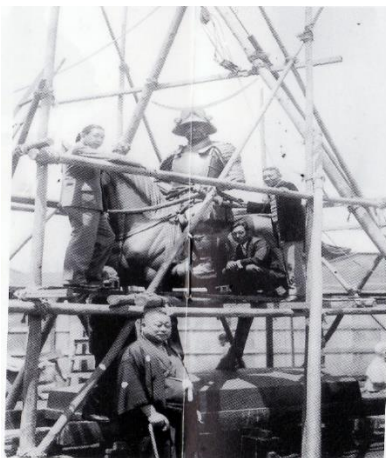
小室は新聞の取材にて「私はなんだか藩祖公の銅像をつくるこの日のために彫刻家に生  
れてきたような気がします」と新聞に語っている。その作業行程はしばたの郷土館に小室達  
先生の日記とともに保管されている。





(石膏で固められた像(しばたの郷土館資料))(鑄造中の騎馬像(しばたの郷土館資料))

小室は帝展に無鑑査で連続出展、帝国美術院の委員を務めていた頃の1933(昭和8)年に伊達政宗公没後三百年祭を記念して騎馬像を建立することが決まった。小室達先生は彫刻家として名声を得ており、郷土出身の芸術家として友人たちの働きかけもあり1933(昭和8)年6月に制作者に選ばれた。小室は徹底的に調査・研究し、試行錯誤の末、1935(昭和10)年1月29日、総重量975kgの金属を使った伊達政宗公騎馬像が東京の日暮里の伊藤鑄造所で鑄造され完成した。銅像は1603(慶長8)年の仙台入府時の政宗公37歳の姿をモチーフとしており、奇遇にも小室もこの時37歳で、長男も誕生し絶頂期ともいえる時期であった(柴田の三人回顧展実行委員会1991)。しばたの郷土館には1928(昭和3)年1月から1952(昭和27)年12月までの小室達の日記が保管されておりこの時代の小室達先生の気持ちを察することができよう。



(運搬前に伊達伯爵が視察(しばたの郷土館資料))(トラクターで運搬中の騎馬像(しばたの郷土館資料))

出来上がった騎馬像は、5月12日に仙台に向けトラクターに牽引されながら東京を出発し5日間かけて移動のなか多くの歓迎を受けて16日には仙台城址に到着した。そして開幕式の5月23日には制作者である小室の挨拶は割愛されたなかで式がとりおこなわれた。



小室達日記 1935(昭和10)年5月23日 (しばたの歴史館所蔵)

筆者は、この居たたまれぬ虚しさを生前平野博氏からお伺いした。当時の情景を感じるためにも筆者はあえて報知新聞宮城版 1935(昭和10)年5月25日の新聞を掲載したい。つぎに紹介するのは、その除幕式のために準備をした小室達先生の挨拶文である。







# 一生一代の大作の爲

## 全我の魂白を没入す

### 除幕式に於ける小室氏の挨拶

本邦彫刻界の中堅、帝展 運搬者四名が如何に數多  
委員小室達氏(三七)が實にの犠牲と戦ひ協力し、あ  
三ヶ年間、帝展は勿論あの一代之名作を作られた  
らゆゑ製作を中止して心か——除幕式當日に於  
血をそそぎ遂に完成したてなされたる製作者小室  
藩祖政宗卿銅像除幕式は 達氏の挨拶を掲げて讀者  
去る二十三日日出度く青 諸氏の参考に供する  
葉城天主台上に於て未曾  
有の盛大裡に舉行された 本日除幕式の式典に列す  
が作者小室達氏が三ヶ年 最も欣幸とする處にして  
間如何に努力に努力を重 感慨無量なるものあり  
ねられたか又完成に至る 始め銅像製作を委託せら  
までの道程に於て如何に 始め銅像製作を委託せら  
原型製作者、百里の長路 り、や先づ卿の一代に關  
作に移る 史實の考証と

する文獻其の遺業及遺蹟 傳説等全面的に研究調査  
を遂げ彌々卿の人格の崇 高なるを偲び又瑞巖寺瑞  
鳳殿に御木像を仰ぎ又画 像を拜して御英姿を把握  
し御威風を對し益々敬虔 誠を感ぜんとす  
の念を深ふし且又甲冑武 具馬具等の御遺物を拜觀  
し特に必要を感じ馬學全 般的調査研究をなし始め  
て二尺大の雛型により構 圖を練り次に等身大の習  
作に移る 史實の考証と

馬種の正鶴を期すべく史 實は調査員諸氏に諮り馬  
は陸軍獸官横田熊五郎閣 下及び伯樂渡邊豐藏氏に  
質し兩氏の獻身的なる御 指導により漸く具像し吾  
等の藩祖公伊達政宗卿三 百年祭に當り宮城縣青年  
團記念事業として卿の德 風偉烈を顯彰し特に忠孝  
兩道の頌徳奉讃のため卿 の御像を當御本丸趾に建  
設し永遠に御英姿と御遺 徳を偲ばんとす

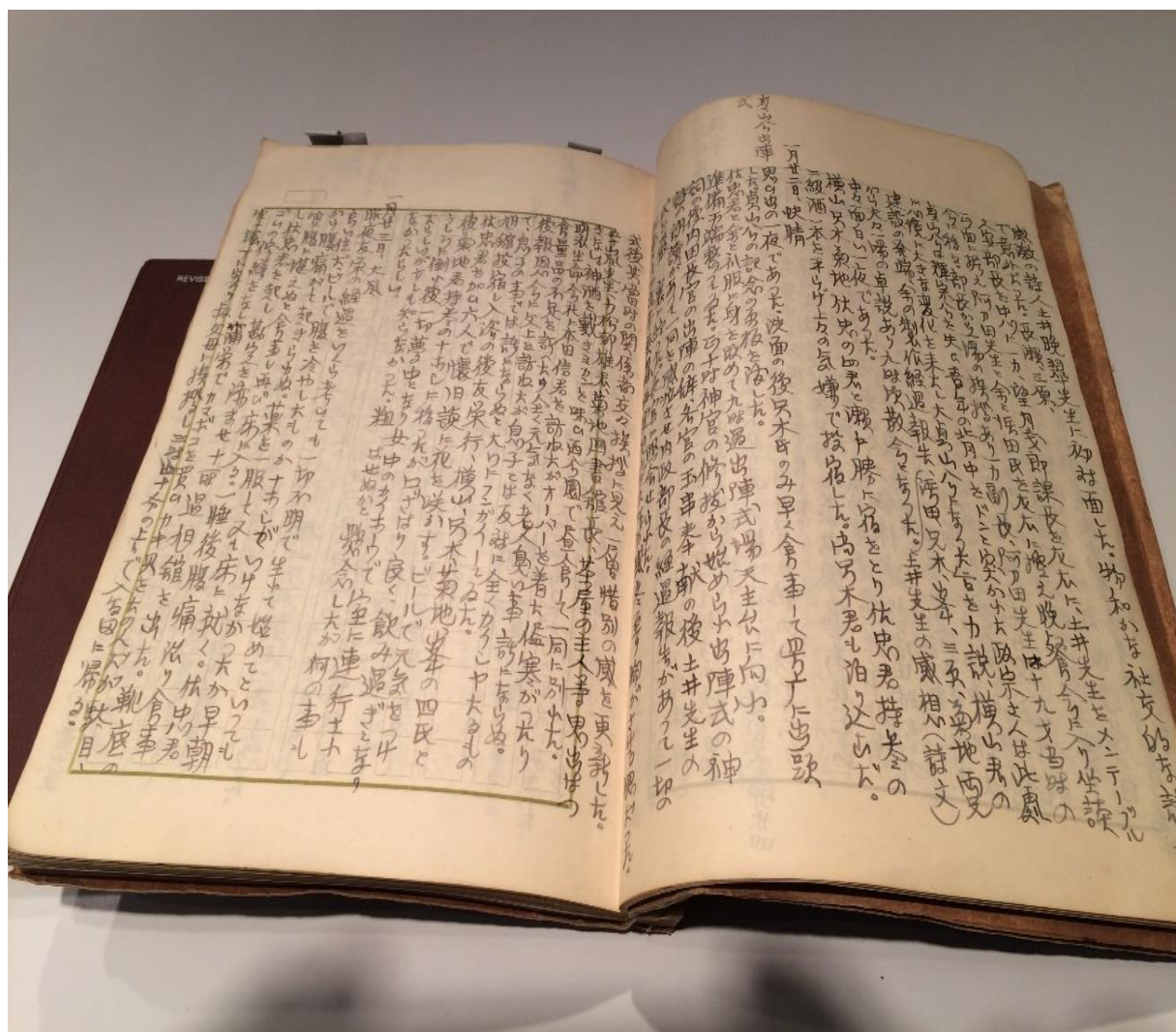
昭和十年五月廿九日

### 不 忘 新 聞

代の大作として此処に工し披ます主従一体只管工  
を竣へ伊達伯爵閣下を始 程を進め完成を急ぎ一方  
め關係各位多數の御批判 調査員の要望を容れ新規  
と御賛同を仰ぎ等身雛型 合金を研究し耐震、耐酸  
を決定し最期の本製作に の兩特徴を兼備せる合金  
入る。これよりは専ら藝 を作製し之を以て鑄造せ  
術的作品たらしめんと更 らる。抑も我が國鑄  
に心に鞭撻し雛型に見る 造界に一新機軸を劃せる  
長所を探り足らざるを補 ものに我が邦最高位の岡山  
以全我の魂魄を没入し極 縣萬成産の龍王石を採用  
力研究の度を深め漸く完 成の域に達するや齋藤子  
爵閣下の御臨席を忝ふし 様式を探り入れしめたり  
特に最終の御批判と御賛 同を仰ぎ此処に全く原型  
の石膏型完成を見るに至 る。これより直ちに美術  
鑄造家伊藤和助君の手に 移し鑄造を開始す。伊藤  
君克く職工を監督し日夜 青山常治君は東京より住  
勤勉刻苦而も原型を忠實 居を遙々現場に移轉し  
に觀察し苟くも私心を差 食を忘れ配下を激勵し  
設計圖を忠實に作製し見 石の工程に際し各方面の  
激勵聲援指導の力亦偉大 なるものあり或は有益な  
る參考資料を提供して研 究の便を與へられ或は眞  
心をこめて神佛にその成 功を祈願せられ又銅像運  
送に際しては百万萬全の 道を開き一路平安を期し  
祖公の御遺徳を敬慕し青 年團の意圖を体得し作者  
の精神を汲み協力一致利 害を超越し克くその本分  
を完了せられたり 三君に對し衷心より深甚  
の謝意を表するものなり 願れば此の事業創始以來  
茲に五稔霜、其の間關係 者各位の銳意敢行の奮闘  
努力實に涙ぐまきもの 藩祖公銅像製作者  
小室 達



1944(昭和 19)年 1 月 22 日の小室の日記には出陣式に出席した際の想いが記述されている。「思い出の一夜であった。礼服に身を改めて九時過ぎ出陣式場天主台に向かう。正十時、神官の修祓から始められ、神詞、出陣の辞、玉串奉献の後、土井(晩翠)先生の詩の朗読があって一同を感涙させた<sup>註3)</sup>。作者として玉串を奉奠、再度見上げた時は万感こもこも至り胸がさける思いだった」この夜、小室は痛飲し翌日の日記に「昨夜の経過をいくら考えても一切不明で生まれて初めてといっても良いくらいだ」と記している。不幸は続き、1945(昭和 20)年 7 月には甲府に疎開していた娘・りり子が空襲で死亡している。



小室達日記 1944(昭和 19)年 1 月 22 日 (しばたの郷土館所蔵)

拜啓 嚴寒の候益々御清穆の段奉賀候  
陳者昭和十年來青葉城趾に縣下を睥睨し軍事、産業、教育  
文化等縣民の士魂培養に任せられたる藩祖伊達政宗公像  
には凄愴苛烈なる決戦下愈々出陣せられることに相成候  
に付ては之が壯途を祝福し左記に依り出陣式舉行可致候  
間御參列被成下度此段御案内申上候 敬具

昭和十九年一月十五日

宮城縣知事 内田 信也  
仙臺市長 今村 武志  
宮城縣青少年團長 内田 信也  
宮城縣護國神社々司 佐藤 重三郎

一、日 時 一月二十二日(青少年團記念日)午前十時  
場 所 青葉城趾



小室達に届いた出陣式通知(しばたの郷土館提供資料) 小室達写真(しばたの郷土館提供資料)

5. <sup>おおいけただお</sup>大池唯雄 小説家について



大池唯雄(しばたの郷土館提供資料)

大池唯雄(1908年10月30日-1970年5月27日)は、日本の作家で本名は小池忠雄である。宮城県柴田郡船岡町(現在の柴田町)出身で仙台第二中学校(現宮城県仙台第二高等学校)、旧制第二高等学校文科甲類卒、東北帝国大学文学部中退した(柴田町編さん委員会1992:1189-1196)。大池は1938年、「兜首」「秋田口の兄弟」で、第8回直木賞受賞を東北

初受賞した。大池は幕末や明治維新など、歴史に題材を求めた短編を多く残している(小池 1945;大池 1967;1970)。船岡中学校校歌の作詞も手掛けた。大池は直木賞受賞前から作家大仏次郎氏の知遇を得、上京して創作活動に励むように勧められていたが、一貫して仙台に留まり、1945(昭和 20)年、空襲のため柴田町に疎開後は、執筆活動のかたわら社会教育にも力を注ぎ、槻木公民館長、柴田町公民館長などを歴任している<sup>註4)</sup>。

柴田町船岡が全国に知られるようになったのは、疑いもなく「樅ノ木は残った」を著した山本周五郎氏の光陰に他ならない。山本周五郎が、質屋の店員だった十代の時に原田甲斐の小説を読み「原田甲斐は悪人ではない、いつか俺は之を小説に書く」と決意して 40 年の時を経て小説「樅ノ木は残った」が誕生した(福田 2016:207-209;秋山 1979:80-84;村上 1928)。山本周五郎は、「樅ノ木は残った」を纏めるにあたって船岡の街をはじめ歴史に係わる場所を自分の脚で歩き自分の目と耳で確認をして調べていった記録が残されている(北影 2013;山本 1969)。その案内をしたのが大池唯雄であった(柴田の三人回顧展実行委員会 1991;柴田町 1992:1123-1125;1189-1196;山本周五郎展連絡事務局 2003;山本 1998:299-300;佐藤 1984:80-85)。これらの情報は、元しばたの郷土館館長、郷土史研究者である日下龍生氏がコツコツとまとめられた資料を参考にしてきた。以下にあげる齊藤博先生の情報も日下先生の資料を参考にまとめてみたい。

## 6. 齊藤博 民衆史家について



【齊藤博史学集成Ⅱ 地域社会史と庶民金融】 藤原書店 (2002)より掲載

<sup>さいとうひろし</sup>齊藤博先生(1934-2000)は 1934 年に神奈川県横須賀市生まれて 1967 年に早稲田大学第一政治経済学部卒業後大学院進学した。獨協大学専任講師を経て、1975 年獨協大学教授となり 1986-95 年獨協大学経済学部長を奉職する。1990 年に文学博士を筑波大学より授与される。1992 年中国天津特別市・南開大学客員教授、中華人民共和国四川省・社会科学院客座研究員、榮譽教授。1995 年獨協学園 100 年史編纂委員長を経て 2000 年 10 月 17 日に東京慈恵医大柏病院にて逝去された(柴田町図書館サポート委員会 2018)。

色川大吉(2002)は齊藤博先生について以下のように語っている。「『絶望の明治農村』から齊藤さんは地域民衆史という底辺の視座に立って、東北の農村研究をはじめていたようだ



が、当時私はそのことを知らなかった。真に研究同志であることを痛感させられたのは、一九六八年五月の歴史学研究会大会で、私が「天皇制イデオロギーと民衆意識」という研究発表をし、満座の冷笑と黙殺という仕打ちを受けたとき、敢然と独り擁護に立上ってくれたのが齊藤博氏であった。「東風は西風を圧倒す」「絶望の明治農村」という二文章を送ってくれたのはその直後であったように思う。とくに後者は私に深い感銘をあたえた名論文で、『獨協大学教養諸学研究』第三号(1968)に発表されたものであった。今読んでも、そこには絶望的情况下の底辺民衆への熱い共感と、頂点の明治天皇への辛辣な批判が盛りこまれており、晦渋な文体の中にも齊藤史学の志が看取できるのである。私は翌六九年に執筆した『明治の文化』(1979.4 岩波書店刊)の7章を、この「絶望の明治農村」から書きはじめている。後にコロンビア大学のキャロル・グラック教授(当時は大学院生、『明治の文化』の共同翻訳者の一人)が来日したとき、齊藤氏を民衆史の開拓者の一人として訪ねたというもうなずける。齊藤博氏の1970年代の次の著作群は何を示すものであろうか。『近代日本の社会的基盤』(1973)、『民衆史の構造』(一九七五)、『民衆精神の原像』(1977)。民衆史は、定説のようにいわれる「色川大吉、鹿野政直、安丸良夫の三人が開拓者」なのではない。地域民衆史や民衆思想史、民衆社会史など多義的な民衆史をひらいた先駆者は齊藤氏はじめ他にもいるのである。齊藤さんは謙虚な人だったから、自分を押し出さなかつただけだ。1987年11月14日、我孫子の村川堅太郎先生の別邸で芳賀登氏と私と齊藤氏の三人が延々六時間にわたる「地方史と民衆史」の座談会をしたときにも、齊藤氏は司会、聞き役に徹していた。この座談は戦後の全時期にわたる研究史にふれたもので、高木繁吉氏によって『我孫子市史研究』12号に114ページ分も収録された。戦後の在野の研究状況や民衆史の形成過程に光をあてた貴重な記録となっている。その後も私は何度か我孫子でお逢いする機会があったが、晩年の齊藤さんには高木繁吉氏(獨協大齊藤ゼミの出身者で我孫子市史研究会の中心的存在)が言われたように、「二十一世紀の我孫子市史での齊藤先生には『窮民明細帳』の書類群と柳田の『故郷七十年』の一節を繋ぎ合わせた、『絶望からの再生』の地域社会史研究を期待したかった」。また『増田実日記』と手賀沼畔の白樺派の文人たちを織り合わせた地域社会史を展開してほしかったと、私もそう思う。」(色川2002)

柴田町の郷土歴史家の日下(2000)は自身のblogのなかで「ある民衆史家の死」と題して齊藤博先生について以下のように紹介している。「齊藤先生の家系は父上の代まで槻木町に在住していた。齊藤先生と柴田町との関わりについて、齊藤ゼミに語り継がれている伝説がある。30代の初め、昭和40年代のごく初めの事で柴田町役場に資料採訪に来町されたときの事である。役場の駐車場に古紙業者のトラックが駐車しており、和紙の束を積み込む作業の真っ最中であつた。先生は問答無用、和紙の束を庁舎内に戻させたというものである。これが、伝説ではなく事実であることを私は確認している。私が柴田町の職員として町史の編纂の仕事に就いた年、庁舎は新築され大量の廃棄文書が旧庁舎の最も広い会議室に山積みされていた。日下氏はそのなかから、編纂に必要と思われる文書を選びだす作業にあつたと回想している。その文書に大きな段ボール箱(家具調TVが2台入るほどの)に入った文書

が加わった。その箱は教委に机を置いたときから部屋の一角に置かれていたものであった。それが、齊藤先生の武勇伝の賜物であることを知ったのは何年か後のことであった。当時、仙台大学の講師をしておられた郷土史研究者である田島昇氏が役場文書を見たいというような来訪目的で、棚に積まれた文書を一瞥し齋藤先生について日下氏に尋ねた。日下氏知らないというと、柴田町の資料を使って『近代日本の社会基盤』(1973)という本を書いたことを教えられた(齊藤 1973)。齊藤先生が編纂室に見えたのは、獨逸百年史の資料採訪のためであった。獨逸協会と柴田町との関係は、柴田意成(柴田倫之助先生御尊父)が1884(明治17)年ころに獨逸協会学校に入学したということであった。中途退学したらしい協会に記録はないが、柴田町になにか残っていないか、というのが来訪の目的であった。武勇伝をうかがったのはこの時のことでトラックから強引に引き降ろさせた資料を使って書きあげたのが『近代日本の社会基盤』であり、これが近代史の先輩研究者から評価された。民衆史家齊藤博が第一歩を踏み出した、その基礎資料があつた和紙の束にあつたことを話されたのであつた。齊藤先生にとって、柴田町は単に父祖の地であるだけでなく、研究者としての揺籃の地なのだということを改めて感じると同時に、失つたものの大きさを知つたことを日下氏は回想している。故齊藤博先生の奥様、小島幸枝先生より平野博町長へ宛てた礼状のなかに齊藤先生の蔵書及び収集品の一切を柴田町に寄贈するという内容の遺言があることで納めていただけないかという依頼があつた。平野博町長の決断は早く日下氏は町長の指示を受けて、上京した折りに小島先生と遺言執行人の弁護士とお会いし搬入までの問題点などについて協議した。蔵書は大学の研究室や自宅など3ヶ所に分けてあり、その一部の目録を頂戴したが、最終的にどれくらいの量になるかはわからないが今、住民が最も望む施設は図書館であることを察知しての判断であつた。」(日下 2000)。齊藤博教授の蔵書と収集資料は、歴史、社会科学、文学の分野を中心とした多岐にわたるものが多く9,885冊の目録外の外国書籍があり、蔵書は総数で1万数千冊の書物が保管されている。このように柴田町は多くの先人によって今日の町が存在しており先人に耳を傾けると貴重な歴史を学ぶことができる。筆者は以前伊東七十郎の歴史をまとめているなかで平野博氏が武術の指導を米軍の兵士に指導している記事と出会い、貴重なお話を平野博先生より伺いそれをまとめたものをお渡しした際に大変喜んで頂いたことを昨日のように回想している。そのような折りに昨年2019(令和元)年の8月19日に平野博氏のご逝去の知らせが入ってきた。柴田町にとってとても重要な貢献者のひとりである。平野氏は自らが高校へ進学したくても家庭の事情でいけなかったことと、柴田町に是非高校を設立したかった思いを分かち合ってくださつた。その結果が今日の柴田高等学校(普通科・体育科)として1986(昭和61)年に開校の運びとなつた。2020年11月12日宮城県高校野球連盟は、来春甲子園で開催される第93回選抜高校野球大会の「21世紀枠」に、県立柴田高校を推薦すると発表した。その理由は、今秋の東北大会で準優勝した好成績に加え、昨年台風19号の被災地でのボランティア活動などが評価された。柴田高校野球部は1986年の創部。夏の宮城大会で2回の準優勝を果たすなど公立の強豪として知られており熊原健人・小坂誠という2名のプロ野球選手も排出して

いる強豪校でもあるが、あと一步のところまで甲子園を逃してきた。出場が決まれば、柴田高校にとっては春夏を通じて初めての甲子園の舞台となる。

城 13版S 2020年(令和2年)11月13日(金) 厚月



主将の遠藤君が掲げる表彰状を見て喜ぶ部員たち。12日、柴田町

## 21世紀枠 柴田を推薦 県高野連 来春の選抜

### 出場決まれば初の甲子園

県高校野球連盟は12日、来春に甲子園で開催される第93回選抜高校野球大会の「21世紀枠」に、県立柴田高校を推薦すると発表した。今秋の東北大会で準優勝した好成績に加え、台風19号の被災地でのボランティア活動などが評価された。

柴田高校野球部は1986年の創部。夏の宮城大会で2回の準優勝を果たすなど公立の強豪として知られているものの、あと一步のところまで甲子園出場を逃してきた。出場が決まれば、柴田にとっては春夏を通じて初めての甲子園の舞台となる。

この日午後4時過ぎ、校内では推薦校に選ばれたことを表彰するセレモニーがあり、県高野連の丹野高雄会長が土生善弘校長に表彰状を手渡した。

同席していた主将の遠藤 瑞祐玖君(2年)はこの選出に恥じぬよう、これからもチームの和を大切にしながら日々成長していきたいとあいさつした。

その後、練習していたチームメイト全員がグラウンドに整列。遠藤君が表彰状をチームメイトに掲げて見せると、部員たちからは「おお」という歓声が上がり、笑顔が広がった。

今秋は高城3位で東北大会に出た、2011年夏から3季連続で甲子園準優勝した八戸学院光星(青森)や東日大昌平(福島)など3県の優勝校を次々と破る快進撃を見せ、史上初の準優勝を決めた。

原動力となったのは、東北大会準決勝で甲子園常連の日大山形(山形)を完封したエース谷木亮太君(2年)。県大会では全試合で先発し、エースを軸に堅い守りから流れを作るのがチームの持ち味だ。

東北地区の推薦枠は1校で、12月11日に発表となる。来年1月29日に全国9地区の候補校から3校が選ばれる。

仮に21世紀枠から漏れても、東北大会を制した仙台育英などとともに一般候補校にも選ばれている。県立校の選抜出場となれば、石巻工が出た12年以來だ。

平塚誠監督は「今回選ばれたのは、今までやって来たことが実を結んだ結果だと思う。これからも一層謙虚に練習に励んで、体だけでなく、精神面も成長して、心技体で戦えるチームになりたい」と語った。

(遠藤 啓子)

(朝日新聞宮城版 11月13日掲載)

最後に先人達が刻み込んでくれた歴史に感謝するとともに平野博前町長に対しての心からの感謝とご冥福をお祈りする意味を含めて先回纏めた論文から柴田町名誉町民・前柴田町長平野博氏の歩んだ道を振り返り結びとしたい(高橋 2017)。



平野博氏・舟山まり子氏来研(2015.9.14)平野博氏海軍時代

## 7. おわりに

筆者が船岡地域の武道の歴史を調べていたときに、戦後において海軍柔道を継承したのは、筆者が学生時代に柴田町町長であった平野博氏（1921（大正 10）年 11 月 28 日-2019（令和元）年 8 月 18 日）であったことが柴田町史に誌されていることを発見したことにある。現在の自衛隊船岡駐屯地は、東洋一の海軍火薬 簫跡で戦後米軍第十四軍団空挺師団隷下の第百八十七連隊が進駐し平野博氏が米軍に赴き海軍柔道を指導したことが記載されている（柴田町 1989:826;828-829; 朝日新聞仙台支部 1987:165-170; 海軍練習聯合航空總隊 :1944）。平野博氏の人生も伊東七十郎先生が継承された武士道精神に繋がるものがある。平野博氏はアメリカ兵士に柔道を指導した際に、「投げ飛ばされて、打ち所が悪かったりすると、負けん気な彼らは、ルールを無視して、ボクシングの構えで殴りかかって来た。たまには、まともなパンチを食らうこともあった。しかし、決して痛みを表情には出さず、礼節を崩さないよう心掛けた。そうした姿勢が通じてか、やがて米兵たちは、平野さんに一目置くようになった。また、人望を伝え聞いたキャンプの日本人作業（員）たちも、米兵との間にトラブルが起きると、仲裁を頼みに来た。平野さんが出て行くと、日本人をいたぶっていた大男が、小さくなって、『ジョークのつもりだったんだ。勘弁してくれ・・・』こんな光景が、決して珍しくなった。」と記されている。平野博氏は長年の柴田町長や全国町村会副会長での功績等により旭日中綬章を受賞された。1947(昭和 22)年の第 1 回統一地方選で史上最年少 25 歳で県会議員となり連続 8 期奉職された。最後に、柴田町の文化の宝庫として、

如心庵じょしんあんという立茶室がある。この茶室は船岡城址公園の麓にある「しばた郷土館」内に所在

しており、愛知県犬山市にある国宝「如庵じょあん」を写したものである。如庵は、織田信長の実弟、

織田長益おだながます（1547-1622 号は有楽齋）が 1618（元和 4）年に建てたものである（堀 1997; 金子 2012; 坂口 1991）。1994（平成 6）年に開席した如心庵の建設にあたっては、名古屋鉄道株式会社の協力を得て、ほぼ忠実に如庵の意匠を再現している。茶道は、瞑想の処であり、座禅や祈りに繋がる文化が継承されている生きた文化である（栗田 1990; 増淵 1996; ミル

ワード 1995 ; 千 2011)。如心庵の建立にあたって当時の議会では多くの議論の末に決定に至ったことを町民から聴く機会があった。柴田町前学芸員の小玉敏氏が平野博前町長と共に愛知県の犬山城の東にある庭園・有楽苑にある国宝茶室如庵を訪問し庵の中で静かに正座をしているとひとすじの光の木漏れ日が部屋を照らしまさしく柴田町に必要なものはこの見えぬ静寂であるとそこにいるもの皆が感じ取ったという神聖な経験を拝聴する機会を得た。この設立にあたっては賛否両論があったが、今となっては、如心庵は柴田町のみならず宮城県における重要な交流文化の処となっている。これも、偶然の出来事ではなく、柴田の先人らが当時の平野博前町長をとおして温故知新の学びと理解による先見の明が、今日の文化を築いてきたとも考えられる。今後ともこれらの学びが「若者は賜であり、齢は芸術である Youth is A Gift Age is An Art」の如く未来の世代へと継承されることを祈念し末筆とする。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたって柴田外記朝意夫妻の絵を紹介する許可を頂きました柴田節子様  
様に感謝をしたい。そして柴田町の郷土史関連資料を提供して下さったこととともに  
学生の地域を知る学習に協力して下さった柴田町郷土館の小玉敏様、岡山卓矢様に感謝  
したい。また柴田町を知るために貴重な資料「炎・その夢と禱りの軌跡」を提供して下さ  
った加茂商店代表の加茂様に感謝したい。そして本稿の註 3 で紹介されている土井晩翠関  
連の資料を提供して下さった宮城県立図書館の職員の方々にも感謝の意を表したい。



## 参考文献

- 秋山青磁（1979）秋山青磁写真撮り物語,創文社.
- 朝日新聞社仙台支局編（1987）宮城風土記③, 宝文堂, 186-189.
- 福田和也（2016）山本周五郎で生きる悦びを知る, PHP 新書,1038.
- 堀和久（1997）織田有楽斎,講談社文庫.
- 色川大吉(2002)民衆史の同志として, 機,10月号.
- 海軍練習聯合航空總隊（1944）體育（柔道）指導参考書 .
- 金子暁男（2012）有楽苑築造記,風媒社.
- 北影雄幸（2013）男の風格「山本周五郎」を生きる,勉誠出版.
- 小池忠雄（1945）或る志士之生涯,河出書房.
- 栗田勇（1991）千利休と日本人,祥伝社 .
- 増淵宗一（1996）茶道と十字架 ,角川選書.
- ミルワード・ピーター（1995）お茶とミサ,森内薫・別宮貞徳訳 ,PHP 研究所.
- 村上信（1928）原田甲斐, 玉井清文堂.
- 大池唯雄（1967）史談セント・ヘレナの日本人, 朝日新聞社 .
- 大池唯雄（1970）炎の時代 明治戊申の人びと,河北新報社 .
- 斎藤博(1973)近代日本の社会基盤,蒼文社.
- 坂口筑母（1991）茶人織田有楽斎の生涯,文献.
- 佐藤隆信（1984）山本周五郎 新潮日本文学アルバム 18, 新潮社.
- 千宗屋（2011）茶 利休と今をつなぐ,新潮新書.
- 柴田町図書館サポート委員会(2018)図ボラ,柴田町図書館サポート委員会会報（秋号）,31.3.
- 柴田町編さん委員会（1992）柴田町史通史篇Ⅱ,柴田町.
- 柴田町編さん委員会（1989）柴田町史通史篇Ⅰ,柴田町.
- 柴田町編さん委員会（1984）その時、私は・・・・・・・・・・.
- 柴田の三人回顧展実行委員会(1991)その夢と禱りの軌跡柴田の三人回顧展,柴田町ふるさと伝承館.
- 高橋亮（2017）伊東七十郎重孝の武士道的生き方から学ぶ福祉的哲学の検討と課題,草の根福祉,第 47号,1-13.
- 豊川光雄（2017）柴田町町制施行 60 周年記念事業「しばたの歴史ガイド」, 柴田町文化財保護委員会編,柴田町教育委員会.
- 山本周五郎（1969）縦の木は残った,株式会社講談社.
- 山本周五郎（1998）人は負けながら勝つのがいい, 学陽書房.
- 山本周五郎展連絡事務局(2003)曲軒作家生誕 100 年記念聴く、観る山本周五郎の世界展, 仙台文学館.

## 註

註1 「樅の木は残った」初原稿は、1954年7月20日から1955年4月21日まで、中断の後に1956年3月10日から1956年9月30日まで『日本経済新聞』に連載され、書き下ろしを加え、1958年に講談社(全2巻)で刊行された。

註2 小室達(とおる)没年月日:1953/06/18 分野:彫刻, 彫刻家(彫)

日本陶彫会々員小室達は6月18日肺浸潤のため逝去した。享年53歳。杉並区の自宅で告別式が行われた。

明治32年8月10日宮城県柴田郡に小室源吾の三男として生れた。

大正8年 宮城県立白石中学校卒業。東京美術学校彫刻科塑造部入学。

大正11年 第4回帝展「想」。

大正12年 東台彫塑会展「婦人胸像」「しな」。

大正13年 東京美術学校彫刻科塑造部卒業。研究科にすすむ。帝都復興記念合同彫塑展「淵」妙技賞4席、「清穆」「自作像」出品。第5回帝展「曙光」。

大正14年 第2回東台彫塑会展「習作」「すがた」。東台彫塑会々員となる。第6回帝展「構想」特選。

大正15年 第7回帝展「洗心」無鑑査。

昭和2年 第8回帝展「新月」帝展委員。

昭和4年 第10回帝展「舞」無鑑査。

昭和5年 第11回帝展「念」無鑑査。

昭和6年 第12回帝展「抱和」無鑑査。

昭和7年 第13回帝展「光芒」無鑑査。

昭和10年 伊達政宗騎馬像(仙台)をつくる。

昭和11年 文展招待展「踞める女」。

昭和12年 第1回文展「銀河」無鑑査。

昭和13年 第2回文展「架橋」無鑑査。

昭和14年 第3回文展「髪」無鑑査。女武者木像2軀。(宮城県刈田郡斎川村甲冑堂)。

昭和15年 紀元二千六百年奉祝展「立像」。

昭和16年 第4回文展「座像」無鑑査。

昭和18年 第6回文展「想」無鑑査。

昭和24年 第5回日展「蝉声閑声」出品依嘱。

昭和25年 第6回日展「遙かなる愁」。

昭和26年 第7回日展「はるか」。

昭和28年 6月18日世田谷区世田谷桜病院で病没。

出典:『日本美術年鑑』昭和29年版(159-160頁)

- 註3** 菊地勝之助『宮城県郷土史年表』宝文堂出版販売, 1972【K200.3/キ 1-4】  
pp.499-500「廿二日青葉城址に建立せられし藩祖政宗公の馬上姿の銅像（郷土彫刻家小室達の作）も、金属回収に応召することとなり、（中略）盛大なる銅像出陣壮行式を挙行す。この折詩人土井晩翠銅像出陣の詩あり」  
『河北新報』[マイクロフィルム] 河北新報社【PN071.2/カ】調査期間：1944年1月17日から28日 1944年1月21日4面「藩祖公像あす出陣式」1944年1月22日2面「藩祖公・青葉城をあとに/決戦へ銅像出陣式」1944年1月26日2面「藩祖公に続け 座談会上/生きて西夷を撃つ/銅像出陣譚略に学べ」土井晩翠からの一言あり（綴じ部分の文章は一部判読不可）
- 註4** 仙台文学館編（2014）大佛次郎 大池唯雄 往復書簡集の中で大佛次郎氏が、大池唯雄氏の才能を高く評価していることに対して、直木賞の受章に際しても頑なに辞退の意を示した大池唯雄氏とのやり取りが誌されている。大池氏は郷土に留まり地元の公民館長として働きながら執筆を続けと大佛氏への交友関係を続けた。展 第三号 特集「大池唯雄・濱田隼雄 郷土に生きる」より  
[http://naokiaward.cocolog-nifty.com/blog/2008/04/post\\_f6bf.html](http://naokiaward.cocolog-nifty.com/blog/2008/04/post_f6bf.html)

#### Website

- 吾妻鏡入門第十六巻 <http://adumakagami.web.fc2.com/aduma16b-10.htm>  
日下龍生（2000）ある民衆史家の死，タツの郷土史小話，19，  
<http://www.jet.ne.jp/~seto3104/tatu/t19.htm>  
日下龍生（2000）図書館を思う，29，  
<http://www.jet.ne.jp/~seto3104/tatu/t29.htm>

## 古から学び未来へと向かう福祉の課題：

### 「船岡」の歴史から学ぶ一考察

# Going to the future is searching the past

高橋 亮 (仙台大学)

#### 1. はじめに

日本には JR「船岡駅」が二つある。一つ目の駅は宮城県柴田郡柴田町にある東日本旅客鉄道 (JR 東日本) 東北本線の駅。二つ目の駅は京都府南丹市にある西日本旅客鉄道 (JR 西日本) 山陰本線の駅である。柴田町教育委員会発行の「しばたの歴史ガイド」(2017)の裏表紙には「柴田町には何もないと言われているが・・・文化財について調べれば調べるほど、ミステリアスな町であることが分かった」と記されている。さらに「船岡」という地名について調べてみると宮城県柴田郡柴田町船岡、京都府京都市北区紫野南舟岡町そして石川県白山市八幡町船岡山城跡が存在している。京都府と石川県の二つの船岡に共通しているのは、伊達政宗や豊臣秀吉が尊敬していたといわれる織田信長の崇敬する白山信仰が関連していることである。したがって本稿では、白山信仰にかかわる歴史を調べることをとおして、筆者自身が生活している柴田町船岡に関わる今後の学際的研究について考察を試みたものである。

#### 2. 柴田町船岡の由来

宮城県柴田町船岡の名称の由来を調べてみると伊達政宗の時代に、「四保」、つまり「シノオ」から舟岡に改められた背景として、「風土記御用書出」によると伊達忠宗の命により、四保が「響悪敷・ひびきあしき」ゆえであって、シノオは「死のう」に通じ・・・舟岡の四保氏は「本姓」に復して柴田氏となったと誌されている (柴田町 1989)。一方、別の四保氏は「響」が悪いからとの理由で柴田氏となり、「シバタ」と「シノオ」がどのように結びつくのか、解明されてはいない。新しい村名「舟岡」の最も妥当な説として、四保山の山容があたかも舟のようであるのでついた村名と考えられている。また、四保山が六沼に囲まれた丘陵であり、その舟着場であったことにちなんだものという説もある。藩政時代は「舟岡」、明治二十二年の町村制施行に伴い四ヶ村合併によって誕生した「船岡村」と書表わされたことから今日の「船岡」が存在している (豊川 2017)。

船岡の歴史は現在明らかになっているのは 1200(正治 2)年頃、芝田次郎しばたじろうが源頼家に命を受けた宮城四郎によって亡ぼされたことが「吾妻鏡」第十六巻に以下のように記されている。

「正治二年十月小十三日丙申。今日。宮城四郎自奥州。歸參。去月十四日遂合戦。及晩。攻落芝田館訖。爰有可被感事。工藤小次郎行光郎從藤五郎。藤三郎兄弟。自奥州所領參向鎌倉之處。於白河關邊。御使聞可被追討芝田之由。自其所馳歸。合戦之日。廻彼館後面。射箭不知其員。中之死者十餘人。賊主退散。偏在件兩人忠節之由申之。」これを現代語に解釈すると、「正治二年十月小十三日丙申。今日、八月二十一日に出発した宮城四郎家業が奥州(東北)から帰ってきた。「先月の十四日に芝田と戦った。その夜になって芝田館を攻め落とす。そこで感激したことがある。工藤小次郎行光の家来で藤五郎・藤三郎の兄弟が奥州の領地から鎌倉へ向かっていたが、白河の関のあたりで、幕府の使者宮城が芝田を攻めると聞いて、そこから駆け戻った。戦の日に、芝田館の裏へ回って沢山の矢を射ちまくった。なんとこれに当たり数人が死者となり、敵の大將芝田も引いてしまった。本当にこの二人は幕府への忠節心がある」と申し。」と紹介されている(吾妻鏡入門第十六巻)。

その後の柴田城の詳細は不明とされており、戦国時代に入ると柴田郡は伊達氏の支配下に置かれている。その後、天文年間(1532-55)にかけて柴田城主は伊達氏家臣の<sup>しのおたじま</sup>四保但馬

<sup>じょうちゆう</sup>定朝となり、<sup>しのお</sup>四保氏は後に<sup>しばた</sup>柴田氏を称している。しかしながら1593(文禄2)年に柴田氏は志田郡桑折に転封となった替わりとして屋代景頼が入城した。景頼は居館を設けたが、その後の1615(元和元)年、<sup>ほらだむねすけ</sup>原田宗資(1582-1623)が大坂夏の陣に従軍して多くの手柄を挙げ、同年軍功により4,000石に加増されて柴田郡船岡城主となった。その後、嫡子・<sup>ほらだむね</sup>雅楽(原田宗輔) <sup>すけ</sup>通称 <sup>ほらだかい</sup>原田甲斐(伊達政宗の孫にあたる)が5歳の時に家跡相続を仰せ付けられた。こ

の<sup>ほらだかい</sup>原田甲斐(1619-1671)が柴田町船岡を舞台に紹介された山本周五郎著作小説「樅の木は残った」である。作家山本周五郎(1903-1967)は、14歳の時に村上信著「原田甲斐」を読み「原田甲斐は悪人ではない、いつか俺はこれを小説にかく」と述べてから40年かけてこの世に紹介するに至った(秋山 1979,村上 1923)<sup>註1)</sup>。

1970年にNHK大河ドラマで取り上げられ一躍全国的に知られるようになった(山本1969)。前書きで、京都にも船岡駅(無人駅)があるので調べたところ所在地は京都府南丹市園部町船岡諏訪に位置し、そこから42.6km京都方面に向かうと京都市内に船岡山公園が所在している。そこで京都の船岡山について調べると以下のことがわかった。



### 3. 京都市船岡山

船岡山ふなおかやまは、京都府京都市北区紫野北舟岡町に位置し標高 111.7m、面積 2 万 5000 坪の小山である。今日、この地区は船岡山城の遺構が建勲神社および船岡山公園として整備されており、古の時代より、船岡山は景勝の地として知られている。清少納言も『枕草子』231 段において「岡は船岡」と、思い浮かぶ岡の中では一番手として名前を挙げている。一方では船岡山は、都を代表する葬送地でもあり、吉田兼好も『徒然草』137 段にて「(都の死者を)鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る数多かる日はあれど、送らぬ日はなし」という唄を詠んでいる。船岡山では、1156(保元元)年に行われた保元の乱の後、敗北した源為義みなもとのためよし(1096-1156)とその子供たちがここで処刑されたという記録も残っている(岸谷 1934)。また、1467(応仁元)年には軍を率いる備前国守護の山名教之や丹後国守護の一色義直らが、船岡山に船岡山城を建築して立て籠もったことが誌されている。1511(永正 8)年には細川政賢と大内義興の間で繰り広げられた有名な船岡山合戦が行われた。織田信長おだのぶながの死後豊臣秀吉が正親町天皇の勅許を受け、船岡山に天正寺という信長の廟を建設する予定であったが、石田三成いしだみつなり(1560-1600)の献策により頓挫したが、一帯は江戸時代を通じて信長の霊地として保護されている。1869(明治 2)年に明治天皇の宣下により、1870(明治 3)年東京の天童藩知藩事織田信敏邸内と織田家の旧領地である山形県天童市たげいまおじんじやに建勲神社が造営され、1875(明治 8)年に別格官幣社に列格された経緯がある。織田信長の先祖は福井出身で、福井県の織田町おたちょう(現在は越前町織田)が織田氏は、この地から出たと言われている。織田氏は代々この神官をしており、応永年間(1394~1427)に神官の子・織田常昌おだじょうしやうが斯波義豊氏しばよしとよにその才能を見いだされ、斯波氏の分国の一つ尾張の守護代に抜擢された。その際、故郷の地名をとって苗字に織田を名のるようになったのが織田姓の始まりと言われている。織田家は、先祖代々白山信仰の氏神を祀っており、織田信長自身、日本に来たイエズス会の宣教師ルイス・フロイスが記した「日本史」に、織田信長が「予は白山権現の名において汝に誓う」と言った一文があることから、信長自らが白山信仰者であったことが窺われる(フロイス 2000;ラウレス 1947)。そこで信長の故郷における白山信仰について考察を試みた。

#### 4. 白山信仰と織田信長

織田信長の白山信仰は岐阜県岐阜市にある標高 329m の山（旧名稲葉山または金華山）を中心に始まったと言われている。1201（建仁元）年二階堂行政が山上に砦を設け、1567（永禄 10）年には織田信長の居城として建立されている。「岐阜」という名称は古代中国で周王朝の文王が岐山によって天下を平定したのに因んでつけられたと云われている。この頃から信長は「天下布武」の朱印を用いて、本格的に天下統一を目指すようになった。織田信長は、金華山頂の岐阜城のそばに「上之権現」を祀り、白山を遠く拝むことができる場所としていたという考えられている説がある。織田信長のルーツとともに白山信仰の祖泰澄大師（682-767）も、この近隣に出生していることから、白山の麓では、歴史的な神通力者と、歴史的にも過激な大改革者が生まれていることも何かしらの意味があると考えられる（不二 2012）。今日、白山信仰の聖地は、石川県白山市三宮町ニ 105-1 に所在する白山比咩神社であり、この神社の発祥の地が石川県白山市鶴来地区に位置する舟岡山と言われている。そこで白山市における舟岡山に関する歴史的経緯について考察したい。

#### 5. 石川県白山市舟岡山の白山信仰

白山信仰は、崇神天皇 7 年（前 91）に本宮の北にある標高 178m の舟岡山（白山市八幡町）に神地を定めたのが創建と伝わっている。1480（文明 12）年には大火により、40 余りの堂塔伽藍がごとごとく焼失し、末社三宮が鎮座していた現在地へ遷った経緯がある。霊峰として人が足を踏み入れることを許されなかった白山に、はじめて登拝したのが泰澄（682 年 7 月 20 日-767 年 4 月 20 日）であると言われている（高瀬 1977）。泰澄は、682（天武天皇 11）年に、越前（現在の福井県）麻生津に誕生した。幼いころより神童の誉れ高く、14 歳のとき、夢で十一面観音のお告げを受け、故郷の越知山にこもって修行に専念するようになった。716（霊亀 2）年、泰澄は夢のなかで、天の衣を身にまとい瓔珞（仏像などにもみられる、インドに起源をもつ装身具）を着けた女性が大空の紫の雲の中から現れ、「我が靈感の時が訪れた。早くきなさい」とお告げを受けた（本郷 2001）。それで泰澄は人類史上初めての白山登拝を決意し、弟子とともに白山の登頂を試みたのであった。そして幾多の困難の末、717（霊亀 3）年 36 歳の時に登頂したといわれている（西出 2008）。白山の開山以来、泰澄の名声は広まり、都に赴き元正天皇の病を祈祷し、大流行した天然痘を鎮めるなどの神事を庶民

に行ったことが伝わっている。開山から8年後の725(神亀2)年には、白山山頂で奈良時代を代表する名僧行基(668-749)と出会い、極楽での再会を約束したと云われている。数々の伝説を残した泰澄は、767(神護景雲元)年に越知山で享年86歳にて遷化した(長谷川2015)。

白山は、最高峰の御前峰(2702m)を中心に、大汝峰(2684m)、剣ヶ峰(2677m)、別山(2399m)を主峰とする峰々を総称して述べられている。全国約三千社にのぼる白山神社の総本宮である白山比咩神社の祭神「白山比咩大神(=菊理媛尊)も『日本書紀』に登場する女神のひとりである。『日本書紀』によると、天地が分かれたばかりのころ、天の世界である高天原に、次々と神が出現し、最後に現れたのが男神である伊弉諾尊と女神の伊弉冉尊であった。この男女の神には、国土を誕生させる「国生み」と、地上の営みを司る神々を誕生させる「神生み」の責任が命じられた。女神の伊弉冉尊が火の神を出産した時のやけどで亡くなってしまったことを悲しみ男神の伊弉諾尊は、「黄泉の国」へ妻を迎えにいったところ、醜く変わった女神の姿を見て男神は逃げ出した。怒った女神は男神の後を追ったことが記録に残っている。黄泉の国との境界で対峙するふたりの前に登場し仲裁したのが菊理媛尊である。その後、天照大御神や月読尊、須佐之男尊が誕生した。白山比咩神社では、菊理媛尊とともに伊弉諾尊・伊弉冉尊も祭神として祀られており、菊理媛の「くくり」は「括る」にもつながり、現在は「和合の神」および「縁結びの神」「虫歯治しの神」「疱瘡治しの神」「子ども好きの神」「お産の神」としての平和の神としても崇敬されている(前田2006)。この神を祀る白山の始まりが白山市鶴来に所在する舟岡山である。この地区でも、舟岡山をどこから見ても船をひっくり返したように見えるからそう呼ばれるとか、京都の船岡山をまねたからとも(ここ鶴来の町には、京都にある地名が他にも見られる)言われている。また、「虫歯を治す神」と言われる由縁は、京都府京都市中京区麩屋町通御池上上白山町243に所在する白山神社(氏子数1500戸)の歴史から伝わっている。社伝によれば高倉天皇(1161-1181)の御代1177年に加賀白山社の僧徒が京都へ御神輿を担いで強訴したが、その目的を達成できず御輿を上白山町(現在の白山神社)に放棄して帰山したことを契機に秋の大祭の時は御神輿が、柳池学区全域に操出している。また最後の女性天皇である後桜町天皇(1740-1813)の歯痛の際、神社の神箸を用いて神塩をつけたところ、これを癒し御紋付提灯を拝領して以来歯痛の神様として参拝する人が多くなったといい伝えられている(前田2006)。

## 6. 柴田町の船岡と白山神社との関わり

前述のように宮城県柴田郡柴田町にも船岡駅がある。そしてこの名前は伊達政宗の時代に<sup>しのおやま</sup>四保山から舟岡と名称が変わったと記されている。これまでの経緯を鑑みて、この船岡には石川県白山市の舟岡山と京都府京都市の船岡山となにかしらの関連があることが予測される。それは織田信長との関連である。織田信長（1534-1582）は白山信仰の信者であることに始まり、京都の船岡山に豊臣秀吉(1537-1598)は、織田信長は信長公の霊をなぐさめるために船岡山に寺を建立し信長像を安置するために正親町天皇より天正寺の寺号を賜った。しかし寺の竣工は中途に終わり、その後船岡山は信長公の霊地として大切に保護され明治維新に至り、明治天皇の宣下のもとに1869(明治2)年に<sup>ほんくんじんじや</sup>建勲神社が建立されたのであった。

伊達政宗（1567-1636）は豊臣秀吉の配下において勢力を広げて行った。その背景として政宗の長男<sup>ひでむね</sup>秀宗の名は秀吉の名から一字とって命名されたことにも意味づけられている。

伊達政宗は1579(天正7)年13歳の時に三春藩の三春城主・田村清顕の娘、当時12歳の<sup>めづ</sup>愛姫と婚姻したが、長い間子宝に恵まれなかった。政宗が後継者を願い求めているところ1591

(天正19)年に伊達政宗の庶長子として秀宗(幼名 兵五郎 1591年 1658)が陸奥国柴田郡村田城にて誕生した。この時点では、政宗の正室愛姫に男子がいなかったため、周囲からは「御曹司様」と呼ばれて伊達家の家督相続者と注目されていた。しかし、政宗が数え年で36歳、愛姫35歳となった時に虎菊丸(のちの伊達忠宗)が生まれ無事に育ったため、1603(慶長8)年1月に政宗は虎菊丸を家康に拝謁させたことで、秀宗の立場は急変していったのである。1609(慶長14)年、秀宗は家康の命令により徳川四天王で重臣の井伊直政の娘の亀を正室として迎え徳川陣営に取り込まれる事になった。しかしながら、弟の虎菊丸が1611(慶長16)年12月に江戸城で元服し、将軍徳川秀忠からの一字を賜って忠宗と名乗った事で、事実上秀宗は伊達家の家督相続者から除外されることになった。このように秀宗は父政宗の長男でありながら、仙台の伊達家には政治的に難しい立場の存在と見なされ、最終的には1614(慶長19)年より愛媛県の宇和島藩十萬石の祖として生涯を送ったのである。このような生涯が宇和島市では、「伊達秀宗公物語—政宗との親子の絆—」と題して絵本も出版されている一方で、宮城県誕生地村田には秀宗に関する資料が殆ど見られないのも前述の背景が考えられよう。しかしながら、秀宗公の後も伊達家後世が継承されていき、<sup>だてむねなり</sup>伊達宗城公(1818-1892)という立派な指導者が輩出してきた。したがって伊達政宗の先見の明を広い観点から見れば、仙台の名のごとく伊達家は仙台に留まることなく全治に広がっていったと

もいえよう(神川 2004)。以上のことから、伊達氏に関わる宮城県柴田町船岡の船岡山がこの時代に命名された理由も推測できるであろう。柴田町にも白山神社が海老穴の第 27 行政区集会所の広場南側に鳥居が建立され急な参道の上に社殿が祀られている(井ノ口 1995)。いつ白山神社が建立されたかは不明であるが、柴田町葉坂に所在する<sup>さくせき</sup>拆石神社(807 年建立)にも菊理姫神が祀られていることから、古の時代から白山信仰の影響が柴田町船岡地区にもあったことが予測されよう(柴田町教育委員会 2017)。その地域的な白山に関して、地元の柴田小学校の校歌の三番目の歌詞の中には白山について記されているので以下に紹介する。

柴田小学校校歌(作詞・作曲 佐藤 進 初代校長)

一. そびゆる<sup>ぎおうあお</sup>威王仰ぎみて <sup>のやま</sup>野山のめぐみ <sup>ゆた</sup>豊かなる

わが<sup>ふるさと</sup>故郷の <sup>かじうち</sup>鍛冶内に <sup>かがや</sup>輝きたてる <sup>しばたしょう</sup>柴田小

二. <sup>はやま</sup>羽山の峰に <sup>て</sup>照りはえて <sup>りそう</sup>理想のしるし <sup>たか</sup>いや高く

<sup>あさ</sup>朝な<sup>ゆう</sup>夕なに <sup>たゆ</sup>みなく <sup>あたら</sup>新しき<sup>みちま</sup>道築くなり

三. <sup>はくさん</sup>白山ざくら <sup>とこ</sup>しえに <sup>きぼう</sup>希望ゆたけき <sup>ゆめ</sup>夢を<sup>よ</sup>呼ぶ

<sup>わか</sup>若き<sup>いのち</sup>生命を <sup>すこ</sup>やかに <sup>おも</sup>い<sup>ふか</sup>深めて <sup>まな</sup>学びあう

四. <sup>あたご</sup>愛宕に<sup>は</sup>生えし <sup>おお</sup>大いちょう <sup>ふる</sup>古き<sup>れきし</sup>歴史に <sup>ほこ</sup>誇りあり

<sup>ちから</sup>力こぞりて <sup>はげ</sup>みあう <sup>わが</sup>学び<sup>まな</sup>舎に<sup>や</sup>誉れ<sup>ほま</sup>あれ

## 8. おわりに

これまで本稿では、宮城県柴田町船岡、京都府京都市舟岡山、石川県白山市船岡山における船(舟)岡と白山をキーワードに「古から学び未来へと向かう福祉課題」を見出すために各地の歴史的な繋がりや共通性を探求してきた。そのなかで分かってきたことは、柴田町船岡は仙台藩の影響があることは間違いないことである。とくに伊達政宗との関係がこれまでの船岡の歴史を構築してきたと言っても過言ではない。伊達政宗の夢は、先祖から子孫へ遺産を継承していくことであった。それが千代(1000年)から仙台(永遠∞)へと続くことを願い、せんだいの漢字を変更した理由でもある(周 1986; 曾布川 1981) 註<sup>2)</sup>。筆者が本稿を執筆するきっかけとなったのは、高校時代に将来の教育者としての自分像を

描くべく理想の学び舎を探して入学したのが仙台大学であったことに起因する（高橋 2006）。その後、家族歴史を探究することの重要性を学び母方の先祖を探求したところ、村田町、白石市、そして柴田町船岡太子堂（現在は太子堂公園となっている）にも先祖が住んでいたことが分かった。その後で、小説「樅の木は残った」の歴史を探究し、作家山本周五郎氏の人生録を学んでいった時に、船岡の歴史の奥深さを知るようになってきた（高橋 2017）。それは目先の見える歴史というよりも人為的に消された歴史を探究することで歴史の真意が理解できるということである。船岡に所在する仙台大学の創設者朴澤一郎先生は、「開学当初覚え書」のなかで体育大学を柴田町船岡に開校する構想について以下のように記録している。「私の体育大学の発想が固められたのは、この田園都市の旧海軍火薬廠(かやくしょう)司令部跡地を見たからであった」と記述されている(朴澤 1981)。

平間新午郎町長は、跡地管理の大蔵省「文部省が学校建設を認めてからでないと、売れない」と文部省「用地を売ってからでないと、学校設立は認めない」の折衝から始まり、その他の関係する官庁である防衛庁、内閣官房と四省にまたがり自らその折衝に当たられた。このような平間町長の柴田町への大学新設に対する熱意と好意は、町民あげての支援となり今日仙台大学の学生たちが快適な学生生活を送ることができる基盤が築かれてきたのである。宮城県風土記(1987)には、ある大物政治家の調整で開学予定直前の 1966(昭和 41)年 2 月に認可内示（開学予定日まで 100 日前後）を受けたことも記されている<sup>註3)</sup>。

また、柴田町には<sup>じょしんあん</sup>如心庵という立茶室がある。この茶室は船岡城址公園の麓にある、“しばた郷土館”内に所在しており、愛知県犬山市にある国宝「<sup>じょあん</sup>如庵」を写したものである。如庵は、

織田信長の実弟、<sup>おだながます</sup>織田長益（1547-1622 号は有楽斎）が 1618（元和 4）年に建てたもので

ある(堀 1997;金子 2012; 坂口 1991)。1994(平成 6)年に<sup>じょしんあん</sup>建立した如心庵の建設にあたっては、名古屋鉄道株式会社の協力を得てほぼ忠実に如庵の意匠を再現している。茶道は、瞑想の処であり、座禅や祈りに繋がる文化が継承されている生きた文化である（栗田 1990; 増淵 1996; ミルワード 1995; 千 2011)。如心庵の建立にあたって当時の議会では容易に合意を得るため困難であったと町民の方々から聴いた。しかし今となつては、如心庵は柴田町の重要な交流文化の処となっている。当時の<sup>ひらのひろし</sup>平野博前町長らの先見の明が、今日の文化を築いてきたともいえよう。

筆者が、学生時代に仙台大学で学び卒業論文としてまとめたテーマは、「統合教育の原理」であった。すなわち、単に特別支援教育とは障がいのある子どもと健常な子ども達の交流に留まるのではなく学際的な共育アプローチが全人類（全年齢、男女、全世界）において共通に必要な分野であるということである。上越教育大学では、障がいのある本人と家族が地域

で加齢とともにどのように生活していくかについて各施設の実態調査を実施した。渡米してからは、ユタ大学でジェロントロジー（老年学、創齡学など邦訳あり）との出会いがあり、高齢者と知的障がい者を含めた生活の質（Quality of Life）の研究を実施した。そして帰国してからは、中学校や高等学校で教育する経験を頂き、その後 NPO 日本ケアフィットサービス協会（現 公益財団法人日本ケアフィット共育機構）のジェロントロジーセンター長としてインドに渡って国際会議の準備を兼ねてジェロントロジーの哲学を研究することになった（タゴール 2011）。それが、日本に帰国してから禅とヨガとの接点を理解することになったのである。その後、剣道を学び「残心」という言葉を知る機会に預かった。残心とは「心が途切れることなく、力を緩めたり、寛いでいながらも気配りや思いやりの心を養い育てることである。残心とは、相手に対して誠実に礼を尽くし、高ぶることなく試合・稽古の相手がある事に感謝する心である。残心とはどんな相手からも自らの技術の向上が出来、かつ初心に帰る事ができる心そのものである。」（高橋 2018）。そこで武道の歴史を調べていくと残心から山伏修行の関連性が見えてきた。柴田町の隣の丸森町は、筆者の実家ある北見市と姉妹都市であるが、それとは関係なく修験道の文化が今も残っている宮城県においても大変貴重な地域であることを知った。修験道とは、山伏または仙人をイメージすれば理解できると思う（大形 1992；劉・葛 1993）。仙人は人間の普遍性を追求すべく自然と一体化して生命の可能性を最大限に引き出す修行を行うひとのことをいう（宮家 2001；和歌森 1972）。そのような修行の場を権現という。明治時代に入ってから国の神仏分離に関する法律および廃仏毀釈により仏教寺院・仏像・経巻（経文の巻物）を破毀（破棄）し、僧尼など出家者や寺院が受けていた特権を廃することが行われた。経済的利潤に関連した専門性という言葉が出てきたのはこの時代であると筆者は推察している。すなわち昔の柔術には修行により物事を予知する能力が研鑽されていたが、武道になってから、その予知能力や残心の能力が失われていったことも世の価値観の関心が内側から外側が変わっていった。それが今日の資格や試験の方法にも見受けられることができよう（合気ニュース編集部 2009）。ここが、本稿の最も重要な点で有り、白山信仰の中の菊理媛神の人類への役割を再び深く考える時代に来ていると考える。すなわち、菊理媛神の役割を今日の学問に置き換えると、「和合の神」とは学際的研究、平和研究、「縁結びの神」とは家族研究、「虫歯治しの神」「疱瘡治しの神」とは健康科学研究、そして「子ども好きの神」とは子ども教育研究、そして「お産の神」とは生命科学に関する研究と考えることもできよう。今後の課題として、古の船岡と関連づけて、これまでの学びを振り返り未来にどう結びつくかについてさらに検討していくことが筆者の課題であると考えている。



柴田町に所在する仙台大学も修験道の聖地と言われる蔵王連峰に囲まれた学び舎であり、校歌の中にも「秀峰蔵王」という言葉が筆頭に使われている。蔵王においても白山の泰澄<sup>たいちよう</sup>（682-767）と同じように役小角<sup>えんのおづぬ</sup>（634-701）という修験道の祖がおられたことが歴史に残っていることも仙台圏の歴史と文化に大きな影響を与えていることは間違いのないことである（総本山金峯山寺 2010; 黒須 1996）。白山も修験道の信仰の地として、現在でも古の時代より永平寺の修行僧や修験者らが、毎年修行の場として修行している霊峰である（布施 2003; 金井 1980）。白山の麓には、Japan Advanced Institute of Science and Technology（北陸先端科学技術大学院大学）があり、そこではゲーム・エンタテインメント領域において飯田弘之教授を中心に研究実践が行われている。本講座の目的は大学院ホームページサイトにおいて以下のように紹介されている。「本領域は、ゲーム、機械学習、学習支援、自然言語、AI、コンピュータビジョンの各要素技術を集約し、人間の知覚・認識・思考・感情などの深いレベルの特性の解析とモデル化を合わせることで、人にとっての幸せを実現するエンタテインメントを科学します。そのために、情報学の基盤技術や基礎理論、各分野の専門知識を修得するための教育を行い、さらに研究を通して問題発見・モデル化と具体化・実装と評価・プレゼンテーション・コミュニケーション・スケジューリングなど、高度な科学者・技術者としての能力を養います。」（飯田弘之研究室レポート）。ゲームそのものは人生の縮図のイメージトレーニングの様なものでありそこには人生の倫理も必要である。すなわち、今日求められているのは、単に科学技術の開発研究に留まることなく、科学技術にかかわる人材の生命倫理の認識も高めなければ素晴らしい研究成果も間違った方向に用いられ行く可能性も多く出てくるであろう（Macer 1998; Takahashi 2018<sup>1)</sup>; Takahashi 2018<sup>2)</sup>）。そこで現在たどり着いたことが、これからのスポーツを幅広く考える方向性としては、これまでの身体的スポーツに加えてメンタルに重視した e（エレクトロニック）スポーツが重視されていく事というである（ミア 2018）。すなわちスポーツと科学技術の融合が今後のスポーツと福祉を構築する基盤となり、その基盤をまとめる役わりを生命倫理が担うという学際的学問構造である（Takahashi 2018<sup>1)</sup>）。今日の e スポーツは一般的にはメディア上のゲームと捉えられているが、欧米では 2016 年時にはすでに 7 大学の e スポーツプログラムが導入されており（7 大学の e スポーツ 2016）欧米のトップ 20 の大学に e スポーツゲーマーが競技していることが報告されている（e スポーツトップ 20 カレッジゲーマー 2018）。今後の e スポーツの展開を鑑みるときに、障がい者による知的 e スポーツの参加も推進されていくことであろう（島田 2009）。また日本においても 2018 年 2 月に日本 e スポーツ連合が設立された。今後日本 e スポーツリーグ協会が設立それを可能にするためにはスポーツと情報科学の倫理を構築するために障がいを含む子どもから高齢者に及ぶ生命倫理の共通理解と研究教育実践の融合が求められる。これらの事柄を今後のジェロントロジー研究の中に実践していくことが筆者の課題である。最後に霊峰白山と秀峰蔵王を筆頭に始まる学び舎の今

後の古を振り返り最先端の研究実践活動が展開されることを祈念し校歌を紹介し末筆としたい。

### 北陸先端科学技術大学院大学歌（作詞・作曲 宮下 芳明）

一. <sup>れいほうはくさん</sup> 霊峰白山に守られて <sup>がくふりそう</sup> 学府の理想を <sup>おもと</sup> 追い求め <sup>しんしゅ</sup> 進取の <sup>ましよう</sup> 気性で <sup>せかい</sup> 世界に <sup>ひ</sup> 灯をともし

<sup>ほくりくせんたんか</sup> 北陸先端科学技術大学院大学

二. <sup>にほん</sup> 日本の <sup>こうとう</sup> 荒濤を <sup>みおろ</sup> 見下ろして <sup>じだい</sup> 時代の <sup>へんか</sup> 変化を感じ <sup>かん</sup> 取る <sup>と</sup> 未踏の <sup>みとう</sup> 地に <sup>ち</sup> ゆく <sup>ふね</sup> 船の <sup>ほ</sup> 帆を <sup>あ</sup> 上げよ

<sup>ほくりくせんたんか</sup> 北陸先端科学技術大学院大学

### 仙台大学校歌（作詞 小松 茂人 作曲 佐藤 益喜）

一. <sup>しゅうほうぎおう</sup> 秀峰蔵王 <sup>くもい</sup> 雲井に <sup>あお</sup> 仰ぎ <sup>せりゅうしろいし</sup> 清流白石 <sup>ました</sup> 眼下に <sup>のぞむ</sup> のぞむ <sup>たえ</sup> 妙なる <sup>さかい</sup> 境に <sup>まなびや</sup> 学舎 <sup>た</sup> 立てり

<sup>のぞ</sup> 望みは <sup>る</sup> けく <sup>わこうどつど</sup> 若人 <sup>あ</sup> 集う <sup>ちえ</sup> 知恵に <sup>かけ</sup> なく <sup>ふえ</sup> 不壊の <sup>いし</sup> 意志 <sup>も</sup> てもて

<sup>きわめ</sup> 極め <sup>なんいざ</sup> なんいざ <sup>みち</sup> 道の <sup>おくか</sup> 奥処 <sup>を</sup> を

二. <sup>みち</sup> みの <sup>く</sup> 空は <sup>みどり</sup> みどりに <sup>す</sup> 澄みて <sup>せんだいへいや</sup> 仙台平野 <sup>せいぎ</sup> 精気 <sup>にあ</sup> にあ <sup>ふる</sup> 豊け <sup>ゆた</sup> き <sup>さかい</sup> 境に <sup>まなびや</sup> 学舎 <sup>た</sup> 立てり

<sup>わか</sup> 若き <sup>ち</sup> 血に <sup>も</sup> 燃え <sup>われら</sup> 我等は <sup>つど</sup> 集う <sup>み</sup> 身を <sup>すこ</sup> 健やかに <sup>ひろ</sup> 博き <sup>あい</sup> 愛 <sup>も</sup> てもて

<sup>お</sup> 負わ <sup>ん</sup> かな <sup>いざ</sup> いざ <sup>せい</sup> 世紀 <sup>しめい</sup> の <sup>しめい</sup> 使命

## 参考文献

- 合気ニュース編 (2009)改訂版武田惣角と大東流合気柔術,合気ニュース.
- 秋山青磁(1979)秋山青磁写真撮り物語, 創文社.
- 朝日新聞社仙台支局編(1987)宮城風土記③,宝文堂, 186-189.
- フロイス・ルイス(2000)完訳フロイス日本史〈2〉信長とフロイス—織田信長篇(2),
- 金子暁男(2012)有楽苑築造記,風媒社.
- 松田 毅一・川崎 桃太 (翻訳),中公文庫.
- 井ノ口章次(1995)民俗採訪 宮城県柴田郡柴田町葉坂・成田・海老穴・小成田,国学院大学  
民俗学研究会刊.
- 不二龍彦(2012)決定版呪法全書, 学研パブリッシング.
- 布施泰和(2003)封印された超古代史「竹内文書」の謎を解く,成甲書房.
- 厚誉春鶯・高田衛・阿部真司(1978)本朝怪談故事, 伝統と現代社, 152-153.
- 西出佳那子(2008) 石川県南加賀地域における白山信仰,大阪教育大学地理学会会報,第 55  
号,6-21.
- 黒須紀一郎(1996)役小角 異界の人々,作品社.
- 長谷川義倫(2015)藤原不比等が最も怖れた男 伝説の高僧 泰澄大師, 国山古代史研究所.
- 本郷真招(2001)白山信仰の源流 泰澄の生涯と古代仏教, 法蔵館.
- 堀和久(1997)織田有楽斎, 講談社文庫.
- 朴澤一郎(1981)開学当初覚書, 仙台大学ニュース, 7月1日, 2.
- 神川武利(2004)幕末最後の賢侯 伊達宗城 世界を見据えた「先覚の人」,PHP 文庫.
- 金井南龍(1980)神々の黙示録, 徳間書店.
- 岸谷誠一編(1934)保元物語, 岩波文庫.
- 栗田勇(1991)千利休と日本人, 祥伝社.
- Macer,D.(1998) Bioethics is Love of Life: an Alternative Textbook, Eubios Ethics Institute.
- 前田速夫(2006)白の民俗学へ 白山信仰の謎を追って, 河出書房新社.
- 増淵宗一(1996)茶道と十字架, 角川選書.

ミア・アンディ(2018)Sport2.0 進化する e スポーツ、変容するオリンピック<NTT 出版.

宮家準(2001)修験道, 講談社学術文庫.

ミルワード・ピーター(1995)お茶とミサ,森内薫・別宮貞徳訳, PHP 研究所.

村上信(1928)原田甲斐,玉井清文堂.

村田町史編纂委員会(1977)村田町,226.

劉向・葛洪(1993)列仙伝・神仙伝,平凡社.

坂口筑母(1991)茶人織田有楽斎の生涯, 文献.

佐藤憲一(1995)伊達政宗の手紙, 新潮選書.

千宗屋(2011)茶 利休と今をつなぐ, 新潮新書.

柴田町(1989)柴田町史 通史編 I,柴田町史編さん委員会, ぎょうせい, 84-86.

島田創(2009)e スポーツのイメージに関する研究,早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科  
スポーツ科学専攻,スポーツビジネス領域,修士論文,

周正(1986) 崑崙の秘境探検記,田村達弥訳,中公新書.

曾布川寛(1981) 崑崙山への昇仙,中公新書.

総本山金峯山寺(2010)山伏・修験道の本尊蔵王権現入門, 国書刊行会.

タゴール(2011)ひと MAN, 高橋亮監修, 本の泉社.

高橋 亮(2018)特別支援共育と武道の残心 武道の可能性を探るシリーズ, 月刊 武道  
10月号, Vol.623,28-31.

高橋 亮(2017)伊東七十郎重孝の武士道的生き方から学ぶ福祉的哲学の検討と課題, 草の  
根福祉,第 47 号,1-13.

高橋 亮(2016) 仙台大学体育学部健康福祉学 20 周年の歩みと今後の展望, 仙台大学体育  
学部健康福祉学科 20 周年記念誌, 33-43.

高橋 亮(2006)連載第 24 回私が求める教師像!,教職課程, 8月号,Vol.32.No.12, 56-59.

Takahashi, R.(2018<sup>1)</sup>)The Ideal Visions of JAIST after 15 Years, AWIST2018,16.

Takahashi,R.(2018<sup>2)</sup>) Philosophy of Gerontology with Science and Technology: Personal  
View of Bioethics & Gerontology in Advanced Future, Herald Scholarly Open Access Journal  
of Gerontology and Geriatric Medicine4,1-19.

Takahashi,R.(2018<sup>3)</sup>)How to Reaching out from Gerontology to Bioethics for Developing Philosophy by Self Overlooking Analysis, 5(1),13-26.

Takahashi,R.(2017) Gerontology is My Life and Your Life Japan Hokkaido Kitami 2020 Vision with Philosophy of Applied Gerontology, Odisha Journal of Social Science, Vol.4(2)95-105.

Takahashi, R.(2016) Vision for Gerontological Society in Hokkaido from 2020 To 2030 to Stand within the Grass Roots Welfare Society,Odisha Journal of Social Science,Vol.3(1), 16-22.

高瀬重雄編(1977)山岳宗教研究叢書 10 白山・立山と北陸修験道, 名著出版.

豊川光雄(2017)柴田町町制施行 60 周年記念事業「しばたの歴史ガイド」,柴田町文化財保護委員会編,柴田町教育委員会.

ラウレス・ヨハネス(1947)織田信長とキリスト教, 中央出版社.

内海邦彦(1992)入門白山信仰 白山比咩の謎に迫る,批評社.

宇神幸男(2015)伊達秀宗公物語 政宗との親子の絆, 宇和島信用金庫.

宇神幸男(2013)シリーズ藩物語 宇和島藩, 現代書館.

山本周五郎(1969)樅の木は残った, 株式会社講談社.

和歌森太郎(1972)修験道史研究, 平凡社.

**註 1** 「樅の木は残った」初原稿は、1954年7月20日から1955年4月21日まで、中断の後に1956年3月10日から1956年9月30日まで『日本経済新聞』に連載され、書き下ろしを加え、1958年に講談社（全2巻）で刊行された。

**註 2** 伊達政宗公が仙台城を築城する際に、旧名「千代」から「仙台（仙臺）」に改めた理由がある。それは伊達藩が豊臣秀吉に領地を没収され、宮城県北への国替えを命じられた政宗公にとって、新たな土地で新たな国造りをするのが夢であったことによる。地名に関する由来は諸説あるが、中国唐代の漢詩にちなんだ説が有力である。その冒頭の句「仙臺初見五城楼」の「仙臺」は「仙人の住む臺＝理想の場」の意。千代を超えて永遠に「仙人の住むような理想の国になるように」との願いが込められている。

註3 2016年7月14日武山昭彦氏（元柴田町役場職員、現柴田町社会福祉協議会事務局長）より聴取。ここでいう「大物政治家」とは、角田市（旧伊具郡北郷村）出身の保科善四郎（ほしなぜんしろう）（1891-1991：元海軍中将、元衆議院議員（4期）、日本国防協会初代会長）で、終戦間際には海軍省軍事務局長としてポツダム宣言受諾を決める御前会議にも列席した高官で、戦後最後の証人である。

白川一郎謹画「終戦御前会議」の中に、保科海軍省軍事務局長として描かれている。「保科善四郎の手記」（終戦時海軍省軍事務局長）天皇の聖断で受諾した。

### Website

吾妻鏡入門第十六巻 <http://adumakagami.web.fc2.com/aduma16b-10.htm>

eスポーツトップ20 カレッジゲーマー(2018)

<https://www.onlinecollegeplan.com/league-of-legends-esports-gamers/>

飯田弘之 北陸先端科学技術大学院大学研究室レポート

<http://www.jaist.ac.jp/ricenter/pamph/iida/iida.pdf#search=%27Hiroyuki+Iida+JAIST+PDF%27>

建勲神社 <http://kenkun-jinja.org/funaokayama.html>

白山比咩神社 <http://www.shirayama.or.jp/hakusan/history.html>

船岡山城 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%88%B9%E5%B2%A1%E5%B1%B1%E5%9F%8E>

7大学のeスポーツ(2016) <https://www.redbull.com/sg-en/7-schools-that-offer-esports-programmes>



# 伊東七十郎重孝の武士道的生き方から学ぶ

## 福祉的哲学の検討と課題

高橋 亮 (仙台大学)

### 1. はじめに

宮城県柴田郡柴田町船岡は、山本周五郎著の歴史小説「<sup>もみ</sup>縦の<sup>き</sup>木は<sup>のこ</sup>残った」の中で原田甲斐を主人公としてNHK大河ドラマで取り上げられ一躍全国的に知られることになった。

本稿を記している2017(平成29)年は、筆者が所属する仙台大学開学50周年記念を迎えるとともに、山本周五郎(本名 <sup>しみず</sup>清水 <sup>さとむ</sup>三十六1903(明治36)年6月22日-1967(昭和42)年2月14日)が亡くなって50周年回忌の年ともなっていることに特別な何かを感じた。船岡城址公園の遊歩道を「縦の木が残った」の舞台となった「縦の木」を目指して歩いて行くと左手に、一つの石碑がある。そこには、「伊東七十郎辞世の碑」と掲げられてある。そこには、このように刻まれている。

<sup>ひと</sup>人心<sup>あやう</sup>これ危し <sup>みち</sup>道心<sup>び</sup>これ微なり

これ<sup>せい</sup>精<sup>いち</sup>これ一<sup>なか</sup>まことその中をとる

<sup>こ</sup>古語<sup>み</sup>にいう身<sup>あやう</sup>をば危<sup>こころ</sup>すべし <sup>ざし</sup>志<sup>う</sup>をば奪<sup>ば</sup>うべからず

<sup>また</sup>又<sup>う</sup>云<sup>ころ</sup>殺<sup>す</sup>べくして<sup>はず</sup>恥<sup>か</sup>しめべからず

<sup>また</sup>又<sup>うち</sup>云<sup>かえり</sup>内に<sup>これ</sup>省<sup>よ</sup>てやましからず<sup>こころ</sup>是<sup>ざし</sup>予<sup>なり</sup>が<sup>なり</sup>志

<sup>しょく</sup>食<sup>た</sup>を断<sup>さん</sup>って<sup>じゅう</sup>三十三日<sup>に</sup>目<sup>これ</sup>に<sup>しよ</sup>之<sup>なり</sup>を<sup>なり</sup>書

<sup>わ</sup>我が<sup>れい</sup>靈魂<sup>さん</sup>三年<sup>うち</sup>の内に<sup>ほろ</sup>滅<sup>ぼ</sup>すべし

中国の書経からの引用は以下の通りである。

人心惟危 道心惟微 惟精惟一 允執厥中  
人心惟危 微 惟精惟一誠 厥執中

この意味は、「人の心は肉体があるから、物欲に迷って邪道に陥る危険があり、本来人に備わっている道義の心は物欲に覆われ微かになっている。それゆえ人心と道心の違いをわきまえ、煩惱にとらわれることなく道義の心を貫き、天から授かった中庸の道を守っていかな

ばならない。」(Fig. 1,2,3)。



Fig.1 伊東七十郎辞世の碑<sup>注1</sup>

この句の隣には次の説明が記されている。「右は伊東七十郎入牢の日より食を絶ち、斬首四日前の書である。これは論語や書経礼記に原点を求めることができる。これらの句は単に武芸に秀でたばかりでなく、深く学問を志し、気節を重んじた七十郎の心情吐露でありまた日々の生活訓であったに相違ない。熊沢蕃山に陽明学を学んだ七十郎にとって、この自らを死に至らしめた行動が知行合一の陽明の理念の実践であった。寛文八年四月二十八日仙台の米ヶ袋誓願寺河原で斬首された時、七十郎は三十六歳の壮年であった。昭和四十五年のNHK テレビドラマ「縦ノ木は残った」の放映を通じて伊藤七十郎重孝の剛勇氣節に富む人柄に魅せられ、柴田町の許しを得てこの地に建てたものです。昭和四十九年三月二十七日東京都 野口徳三郎」(Fig.4)



Fig.2 伊東七十郎辞世の碑<sup>注1</sup>



Fig.3 伊東七十郎辞世の碑 寄贈建立者名



Fig.4 伊東七十郎辞世の碑解説 野口徳三郎

2018（平成30）年6月7日は、伊東七十郎重孝氏の殉難三百五十回忌法要を迎える年である。伊東七十郎の辞世の句は、船岡にある仙台大学の学生の学問への志を顧みるにとっても大切なメッセージが刻まれていると感じる。そこで本稿では、命がけで生き抜いた伊東七十郎重孝先生が人の福祉と安寧のために生き抜いた人生から今日の私たちへのメッセージを振り返り考察したい。

## 2. 伊東七十郎が登場する小説「縦ノ木は残った」

「縦ノ木は残った」は、小説家山本周五郎による歴史小説である。内容としては、江戸時代前期に仙台藩伊達家で起こったお家騒動「伊達騒動」を題材にしている。この小説の主人公は、従来は悪人とされてきた原田甲斐（原田宗輔）で、幕府による取り潰しから藩を守るために尽力した忠臣として描くなど、山本周五郎の新しい解釈が加えられている。ウキペディア（2017）には、次のように紹介されている。

「主人公の原田甲斐は、原田家の当主として伊達藩家臣団に組み込まれているが、権勢を求めず、奥羽山脈に抱かれた居館において「朝餉の会」という気の合う仲間との懇談を楽しみとした、穏やかな日々を過ごしていた（Fig.5,6）。しかし彼のいる17世紀半ばでは、まだ藩政の絶対主義が確立しておらず、藩祖の血脈という権威を背景とした有力者たちが、地方知行の経済力を基盤として権力闘争を繰り広げていた。この闘いが原田と彼の友人、家臣たちの運命を変えていくことになる。仙台藩の3代藩主伊達綱宗は、江戸の吉原での放蕩三昧を理由に、若くして幕府より隠居を申し渡された。綱宗には非難されるほどの遊興の覚えはなかったが、仙台藩主の座は嫡男である2歳の亀千代（後の伊達綱村）に移され、綱宗の叔父にあたる伊達兵部が後見役として実権を掌握した。世間の人々は、この一件の裏に大名家の取り潰しや弱体化を画策する幕府の思惑が働いていると噂した。老中の酒井雅楽頭（酒井忠清）と兵部の間に、いずれは仙台藩の半分を兵部に与えるという密約が交わされているとする風聞は、藩内に渦巻き、誰もが疑心暗鬼に囚わ

れていく。兵部は綱宗の過度の遊興がでっち上げであることを隠すために、吉原に同行した側近の畑与右衛門を夫人もろとも暗殺した。かろうじて逃げ延びた娘の宇乃は、近所に住む甲斐に救われた。綱宗が最も信頼していた甲斐は、綱宗の隠居後は後見役の兵部の勢力に取り込まれ、国老の地位を与えられた。兵部の一派のやり口に反発する藩内の人々は、甲斐に冷たい視線を浴びせ、友人達も彼の元から去っていった。それでも一人、甲斐は淡々と職務をこなしている。そんな甲斐の心中を覗こうと雅楽頭は様々に仕掛けてみせるが、この絶対的権力者を前にしても、甲斐には恐れも反発も何一つ波立つ様子はなかった。館において保護をしている宇乃を前にして、甲斐は庭にある樅の巨木の孤高を語った。「私はこの木が好きだ。この木は何も語らない。だから私はこの木が好きだ」。宇乃は甲斐が、樅の木に己の生き様を重ね合わせているように思えた(Fig.7,8)。藩内の権力を欲いままにする兵部の一派は、他の伊達氏一門と激しく対立し、ついに幕府への上訴という事態に発展した。これは仙台藩にとって、幕府に取り潰しの名目を与えかねない危険な行為であった。兵部は万一の場合の安全弁として、かつて雅楽頭から送られた密約に関する自筆の書状を甲斐に託し、評定の場へと差し向けた。史実によると、江戸の酒井雅楽頭邸で行われた評定の席で劣勢に陥った甲斐は、上訴の主である伊達安芸(伊達宗重)らを斬り殺し、自身も斬られて死亡したことになる。これが世に言う「伊達騒動」である。しかし、伊達家の人々の殺害を命じたのは、密約の書状が世に出ることを恐れた雅楽頭であった。あえて全ての罪を被り、絶命する甲斐。これまで人々の蔑みの目にも、何も語らず耐えて来た甲斐の望みはただ一つ、たとえ己が悪人の汚名を着ようとも、仙台藩を無事に存続させることであった。」(石橋 2012; ウィキペディア 樅ノ木は残った 2017)



Fig.5 船岡城址 (著者 2017)



Fig.6 船岡城址から蔵王方面(著者 2017)





Fig.7 船岡城址文学碑全観(著者 2017) Fig.8 船岡城址 文学碑<sup>注2</sup>(著者 2017)

### 3. 伊藤重孝七十郎の人物像

伊東<sup>いとう</sup> 重孝<sup>しげたか</sup> 七十郎<sup>しちじゅうろう</sup> (1633(寛永 10)年癸酉 7月 -1668(寛文 8)年 4月 28日 (太陽暦 6月 7日)) は、江戸時代前期の武士。諱は重孝。通称は七十郎。伊東重村の二男である。伊東氏の系図は工藤左衛門藤原祐経の後継で、祐経の次子六郎左衛門祐長が軍功をもって鎌倉省軍頼経から奥州安積軍四十五郡(現在の福島県郡山市)が与えられたと伝承されている(伊東 2016;土橋 1975:130-149; 齊藤 1970)。伊東七十郎の詳細については、作並清亮(1841(天保 12)年~1915(大正 4)年)によって 1888(明治 21)年に伊達氏史料の中で「伊東七十郎伝書抜」(5輯 144 卷)と題してまとめられており宮城県立図書館で閲覧が可能である。作並は、江戸時代末期・明治期の漢学者で、伊達六代の「治家記録」を編纂し、著書に「東藩史稿」「松島勝譜」がある。

伊東七十郎は、1633(寛永 10)年伊達氏家臣・伊東理蔵重村の二男として仙台にて誕生した。母は塩森氏である。代々奥州安積を領し、1439(永享 11)年に伊達持宗の麾下に属した。また、重孝の祖父・伊東重信は、戦国時代に伊達政宗に仕え、1588(天正 16)年の郡山合戦において政宗の身代わりとなって戦死している武功ある家柄であった。

七十郎は、儒学を仙台藩の内藤閑斎(以貫)、京都にて陽明学を熊沢蕃山、江戸にて兵学を小櫃与五右衛門と山鹿素行より学んだ。また、深草にて日蓮宗の僧・日政(元政上人)に国学を学び、文学にも通じていた。加えて、武芸にも通じ、生活態度は身辺を飾らず、内に烈々たる気節をたつとぶ直情実践の真の武士であった。この情景を表す記録として篁洲漁史(1909)が仙台新報の中で紹介している。「伊東七十郎重孝は伊東利蔵重邑の次男で有名なる肥前重信の孫である重孝は剛直無双の士で容易に人に屈下しない又健脚並ぶものなく一日に二百里は楽<sup>あるけ</sup>に行歩る、尤も其頃の一里は今日の三十六丁である六丁一里の勘定で所謂今日田舎で行はるる小道のことである、其頃仙臺より江戸まで通例八日の行程なる

を重孝は三日で江戸に行き、又三日で仙臺の帰ると云う早足で誠に人間業とは思われない」と記されていた(齋藤 1931; 箕洲 1909)。七十郎の生涯は、熊沢蕃山に学んだ陽明の知行合一の学風をよく受け継いでいたと考えられる(後藤・友枝 1971:8)。熊沢蕃山の書「集義和書巻第一」には学問のあり方について記されている。そこには「博学にして、人にさえ孝弟忠信の道を教えられ候人の中に、不幸不忠なるも候は、いか成ることにて候や。武士の武芸に達したるは、人に勝つことを知るにて候へ共、武功なき者あり。無芸にても武功ある人おほし。兵法者(剣術の達人)の無手の者にきられたるあり。学問の道も同然に候それ知仁勇は文武の徳なり」と記され、学ぶことは知識のみならず志を实践することの重要性が説かれている(齋藤 1970:271-289)。江戸幕府老中・板倉重矩の家老である池田新兵衛とは同門の学友であり、その縁で七十郎は重矩に招かれて軍学を講じ、仕官をすすめられたこともあった。七十郎の師である熊沢蕃山が題を出して和歌を詠ぜしめた時に、七十郎は即座に「心外無物 ちちの花も心の内に咲くものを知らで外ぞと思ふはかなし」「知行合一 写絵に芳野の花ははかるとも 行かでにほいを如何で知るべき」と詠んだ。これらの和歌を見た蕃山は、「わが意を得たり」と喜び、真に学士であると誉めたたと云われている。

伊達氏仙台藩の寛文事件(伊達騒動)において、重孝は伊達家の安泰のために対立する一関藩主・伊達宗勝を討つことを伊東采女重門と謀ったが、事前に計画が漏れて捕縛された。重孝は入牢の日より絶食し、処刑の日が近づいたのを知るや「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、誠厥執中。古語云、身をば危すべし、志をば奪べからず。又云、殺べくして、恥しめべからず。又云、内に省てやましからず、是予が志也。食ヲ断テ、卅三日目ニ書之也 罪人重孝」と施錠されている身である故に口で書いて小人組万右衛門に与えたと云われている。これを書いた4日後の寛文8年(1668年)4月28日、死罪を申し渡され、誓願寺河原にて処刑された。また一族は、御預け・切腹・流罪・追放となった。七十郎は処刑の際に、処刑役の万右衛門に「やい万右衛門、よく聞け、われ報国の忠を抱いて、罪なくして死ぬが、人が斬られて首が前に落つれば、体も前に附すと聞くが、われは天を仰がん。仰がばわれに神霊ありと知れ。三年のうちに癘鬼となって必ず兵部殿(宗勝)を亡すべし」と言った(三原 1975:82-91)。そのためか万右衛門の太刀は重孝の首を半分しか斬れず、七十郎は斬られた首を廻して狼狽する万右衛門を顧み「あわてるな、心を鎮めて斬られよ」と叱咤した。気を取り直した万右衛門は2度目の太刀で重孝の首を斬り落としたが、同時に七十郎の体が果たして天を仰いだという。後に万右衛門は、七十郎が清廉潔白な忠臣の士であったことを知り、大いに悔いて阿弥陀寺の山門前に地藏堂を建てて、伊東七十郎の霊を祀ったともいわれている。1902年愛宕山東登り口の改修工事中に伊東七十郎重孝の遺骸が発見された。遺骸は一族の菩提寺である裁松院に葬られたが、発見された場所に1907年に招魂碑が建てられた。後に碑は愛宕神社山頂の地に移された(Fig.9; 1907(明治40)年建立二百四十回忌)。

七十郎の死によって、世間は伊達宗勝の権力のあり方に注目し、また江戸においては、文

武に優れ気骨ある武士と評判の人物・伊東七十郎の処刑がたちまち評判となった。そして1671(寛文11)年2月28日に涌谷領主伊達宗重の上訴によって伊達宗勝一派の藩政専断による宿弊、不正、悪政が明るみとなり、宗勝や原田宗輔たち兵部一派が処分され伊達家の安泰に及び、重孝の忠烈が称えられたのであった。1673(延宝元)年3月18日には、七十郎の兄・重頼の子である伊東重良兄弟3人が流罪赦されて、1675(延宝3)年5月伊達綱村の御世に伊東家は旧禄に復し再興されたのであった(大槻1970:402-457;柴田町1992:741-743)。

遺骸は阿弥陀寺(宮城県仙台市若林区新寺)に葬られたと伝えられ、のちに伊東家の菩提所である栽松院(仙台市若林区連坊)に伊東七十郎重孝の墓として祀られている。法名は鉄叟全機居士である。また、当時の人々が重孝の供養のため建立した「縛り地蔵尊」(仙台市青葉区米ヶ袋)は「人間のあらゆる苦しみ悩みを取り除いてくれる」と信仰され、願かけに縄で縛る習わしがあり、現在も毎年7月23、24日に縛り地蔵尊のお祭りが行われている(Fig.10,11)。縛り地蔵のある米ヶ袋の河原は伊東七十郎が斬首の刑を受けた場所である(Fig.12)。



Fig.9 愛宕神社境内神門の前



Fig.10 縛り地蔵印



Fig.11 縛り地蔵



Fig.12 伊東七十郎が斬首刑を受けた米ヶ袋河原



## 5. 重孝神社（計仙麻神社隣）

七十郎の屋敷跡（Fig.13,14）のある宮城県石巻市北村には、1930（昭和5）年に建立された伊東七十郎重孝の霊が祀られている（Fig.15,16）。重孝神社は旭山県立自然公園の南東部に位置している。この地では、祭神として伊東七十郎重孝が祀られており、七十郎の存在は地元の住民には英雄、伝説的な存在としてよく知られていたことが窺われる。石碑には「人心惟危 道心惟微 惟精惟一 允執厥中」と刻まれている。



Fig.13 伊東七十郎の屋敷跡



Fig.14 伊東七十郎の屋敷跡



Fig.15 重孝神社



Fig.16 重孝神社説明板

## 6. 栽松院 伊藤七十郎重孝の墓

仙台市若林区連坊には耕徳山「栽松院」があり、伊達政宗の祖母・久保姫の位牌所として、1601（慶長6）年に政宗によって創建された寺院で、ここの伊東七十郎の墓標がある。所謂、仙台の発祥の地とも云える神聖な寺院である。その背景を理解することで伊東七十郎の成したる業の重要性を認識することができよう。久保姫は陸奥国磐城領主・岩城重隆の娘で、

伊達政宗の祖父・晴宗の正室である。久保姫は美人として名高く、当初白河城主・結城氏のもとへ嫁入りすることになっていたが、輿入れの道中、伊達晴宗が強引に久保姫を略奪したという逸話が残っている。衝撃的な出会いをした晴宗との夫婦仲は良好だったようで、政宗の父・輝宗をはじめ6男5女に恵まれた。久保姫は母親から疎んじられていた幼少期の政宗を慈しんだと伝えられ、政宗もまたこの祖母を大変慕っていたと云われている。1594(文禄3)年久保姫は亡くなり、亡骸は晩年を過ごした白石城内の屋敷跡に葬られたが1601(慶長6)年政宗は裁松院を創建して位牌を納めた(法名 裁松院殿月盛妙秋禅尼大姉)。境内には仙台の地名の起源となった千躰仏を納めた観音堂、推定樹齢千年で「政宗公遺愛の櫛」と案内される白櫛がある。このような由緒のある寺院に七十郎の墓標があり同じ場所に並んで父・重村と兄・重頼の墓もある。2017(平成29)年3月23日筆者が妻を伴い裁松院の伊東七十郎先生のお墓参りのためにお伺いしたときに当主の目黒耕道ご住職がお堂から丁度出てこられた。筆者はすぐに自己紹介とご挨拶をして、筆者自身が文献上調べ史跡を巡ってきたことを報告し、その上で伊東七十郎先生のごことご教示頂けないかをお伺いした(Takahashi 2017)。するとすぐにお堂に通され伊東七十郎先生のご遺骨と対面し直接参拝をする機会を賜ったのであった(Fig.18,19)。これまで目黒ご住職も先祖代々この寺院にはとても大切なものが奉納されていることは聴いていたが、それが何かは知らされてはいなかったそうである。それがある日、お母様とお堂を整頓していたときに奥深くに保存されていた箱をあけると「伊藤七十郎」と記されており、おそらく伊東七十郎の存在を知られないように敢えて「伊藤」と印のであろうと教えて下さった。このような巡り合わせによって、ご住職が来年伊東七十郎重孝先生の殉難三百五十回忌法要を迎える年であり、どうしたらよいものか困っておられるお話しをしてくださった。柴田町船岡に所在する仙台大学に学生時代からお世話になっていることがご縁で、伊東七十郎先生という素晴らしい武士道精神を貫かれた存在を知ることができたことは筆者の人生にとってもとても重要な意味があると感じている。目黒ご住職は、幼少時代に、よく寺院に三原良吉先生が訪問されていたことも回想された(三原 1971;1967)。その時に、伊東七十郎先生の遺骨についての資料も話されていたようである。筆者がこれまで調べてきた資料を読んでいくと斎藤荘次郎先生の(1918:81-84)の文献の中で長谷部言人先生が「所謂伊東七十郎重孝の遺骨に就いて」と題して紹介している(Fig.18,19)。その内容の一部は以下の通りである。「予は地方史研究の大切なことを考え、その研究の結果によりて医学上の参考に供したく思うものなるが、当地に来任以来僅かに二ヶ月に過ぎ去るものざれば成るべく地方史研究家に交わりを求めて便宜を得んと心がけ居れり・・・東北学院の清水氏などに交際を願って居るが、過般愛宕向こうの古墳を見、種々の話の序でに伊東七十郎先生の遺骨と云うもの眞福寺に保存しありと聞き、之を一見したく思うて清水氏に依頼せし所、暫くの後に其の遺骨を届けられたり、予は嘗て京都にありし頃石田三成の遺骨というものを見たる事あり、西洋などにては有名なる人物の頭蓋骨に皮の厚さまでも考えて頭部顔面の状態までも想像するなどの研究をやり居れども我が国にてはあまりやらぬことなり、殊に予は経験も浅く数百の骸

骨を見たるに過ぎざれども若し熟練せる人ならば餘り外れざる断定を下すを得べきなり、唯種々の除外例あるものにて骨によりて男女の区別や年齢の老幼等を下すは相応に困難のあるものなり、而して年齢の老幼を決する為に必要缺くべからざるは齒なり、齒の摩滅程度によりて老幼を極めるこのなるに此の遺骨には一個も存せずして且つ甚だしく腐食せられ頭部後頭骨の幾分を残すのみにて前頭顔面等殆どなく右方眼窩の一部、大腿骨、上膊骨各一個其他甚しく腐食して苦しむ程のもの、及小骨片数あり、副葬品として寛永錢六個、水晶の軸壺個、金具、桐板の片など沢山に見らる、此の頭蓋骨は後頭、頸筋の附着部なる突起の角張り居る等より多分男なるべしと推せらる、又年齢を決定するほかの方法は縫合線密着の程度にあり、之は顛顛骨及後頭骨の間にある縫ひ合わせ線が幼時にありては殆ど離れ居るも、だんだん年齢の進むに従ひて密着し来るより老幼を判別基準とするなり、今其伊東七十郎先生の骸骨なるものを見るに此の縫合線は著しく密着して所によりては痕跡をも存せざるまでに進み居るを認む、よりて弱年のものにあらず、又老人に有する萎縮なきより老人にあらざるは明らかなり、則ち発達の頂上に達したる四十歳以上と見て大差なかるべし、尤も女子にありては三十歳より四十歳位までの間にも此の程度に進み居るものなきにあらずと雖も男子にありては未だ嘗て見ざる所なり。・・・以上の観察により之は伊東七十郎先生の遺骨なりと云うことに餘り遠からぬものと断定するを得べきなり。・・・」とある。また清水東四郎（東北学院教授）も「伊東七十郎重孝先生に就いて」と題して寄稿している。



Fig.18 伊東七十郎先生ご遺骨



Fig.19 伊東七十郎先生ご遺骨箱<sup>註4</sup>

## 7. おわりに

柴田町船岡が全国に知られるようになったのは、疑いもなく「樅ノ木は残った」を著された山本周五郎氏の光陰に他ならない。それではなぜ山本周五郎氏は主人公原田甲斐と伊東七十郎に興味をもったのかを明確にしておく必要がある。それは、原田甲斐が山本周五



郎の人生そのものであると柴田町の文豪大池忠雄氏が述べていることから伺い知ることができる。すなわち山本周五郎氏は、生涯、賞を拒み続けた作家と知られ執筆にこの世の生涯に渡って命を注ぎ込んで亡くなる当日までその使命を全うされたからである。本稿では詳細は述べないが山本は生涯この世の権威となる賞を一切受け取らなかったことから原田甲斐や伊東七十郎と共通する武士道精神に溢れていることが鑑みられる(北影 2013:24-34; 清水 1988:24-30)。加えて山本周五郎が、質屋の店員だった十代の時に原田甲斐の小説を読み「原田甲斐は悪人ではない、いつか俺は之を小説に書く」と決意して40年の時を経て小説「樅ノ木は残った」が誕生したことも単なる空想によって纏められた小説ではないということが理解できよう(福田 2016:207-209; 秋山 1979:80-84; 村上 1928)。山本周五郎は、「樅ノ木は残った」を纏めるにあたって船岡の街をはじめ歴史に係わる場所を自分の脚で歩き自分の目と耳で確認をして調べていった記録が残されている。その案内をしたのが船岡出身の郷土作家大池唯雄(1908(明治41)年10月30日 - 1970(昭和45)年5月27日)であった(柴田町 1992:1123-1125; 1189-1196; 山本周五郎展連絡事務局 2003; 山本 1998:299-300; 佐藤 1984:80-85, Fig.20)<sup>注5</sup>。



Fig.20 船岡城址文学碑解説(著者 2017)

柴田町船岡の歴史を鑑みるときに心の武士道との繋がりを感じる。筆者が船岡地域の武道の歴史を調べていたときに、戦後において海軍柔道を継承したのは、筆者が学生時代に柴田町町長であった平野博氏(1921(大正10)年11月28日-)であったことが柴田町史に誌されていることを発見したことにある。現在の自衛隊船岡駐屯地は、東洋一の海軍火薬簾跡で戦後米軍第十四軍団空挺師団隷下の第百八十七連隊が進駐し平野博氏が米軍に赴き海軍柔道を指導したことが記載されている(柴田町 1989:826; 828-829; 朝日新聞仙台支局 1987:165-170; 海軍練習聯合航空總隊:1944; Fig.21,22)。平野博氏の人生も伊東七十郎先生が継承された武士道精神に繋がるものがある。平野博氏はアメリカ兵士に柔道を指導した際に、「投げ飛ばされて、打ち所が悪かったりすると、負けん気な彼らは、ルールを無

視して、ボクシングの構えで殴りかかって来た。たまには、まともなパンチを食らうこともあった。しかし、決して痛みを表情には出さず、**礼節**を崩さないよう心掛けた。そうした姿勢が通じてか、やがて米兵たちは、平野さんに一目置くようになった。また、人望を伝え聞いたキャンプの日本人作業（員）たちも、米兵との間にトラブルが起きると、仲裁を頼みに来た。平野さんが出て行くと、日本人をいたぶっていた大男が、小さくなって、『ジョークのつもりだったんだ。勘弁してくれ・・・』こんな光景が、決して珍しくなった。」と記されている。



Fig.21 平野博氏提供

Fig.22 ある親善（柴田町史通史篇Iより）

伊東七十郎先生がわれわれに残してくださったのは武士道（しきど）の精神である。すなわち思いやり勤勉、慈愛（じあい）の精神である。そのような武士道（しきど）の心を継承していくことが伊東七十郎先生をはじめ七十郎先生が敬愛した原田甲斐公（はらだ かつみ）の人生やそのことを執筆した山本周五郎先生と大池忠雄先生にも共通することがあるといえよう。すなわち生きるということは、自らの名誉のためではなく、隣人の安寧のために生きるということである。1918(大正 7)年 6 月 1 日午後 2 時より耕徳山裁松院（こうとくさんざいしょういん）において伊東七十郎重孝先生（いとうしちろうしゅうこう）の法要が行われた(内藤 1918)。この法要には、「伊東七十郎先生の遺族十餘名を始めとして山田揆一氏（やまだ けんいち）（仙台市長）、鈴木俊輔氏（すずき しゅんすけ）（宮城県議長）、坂本農銀専務など百数十名が参列された」と記載されている。おわりに本稿は「草の根福祉」を刊行されてこられた故田代国次郎先生（たしろ くにじろ）にささげたい。願わくば、伊東七十郎先生の志が子々孫々にされますことを祈念し末筆とする。

## 参考文献

- 秋山 青磁(1979)秋山青磁 写真撮り物帖,創文社.
- 朝日新聞仙台支局編(1987)宮城風土記 3完,法文堂.
- 土橋 治重(1975)原田甲斐 物語と史跡をたずねて,成美堂.
- 後藤 陽一・友枝 龍太郎(1971)熊沢蕃山 日本思想体系 30,岩波書店.
- 合田 一道(2010)日本人の遺書 1858-1997,藤原書店.
- 福田 和也(2016)山本周五郎で生きる喜びを知る, PHP 新書 1038.
- 石橋 輝(2012)亀松山 東陽寺.
- 伊東 知男(2016)安積伊東氏について (安積伊東氏は「伊東」を名乗っていなかった), 郡山地方史研究会,平成 28 年 5 月 21 日資料.
- 海軍練習聯合航空總隊(1944)體育 (柔道) 指導参考書.
- 小池 忠雄(1945)或ル志士之生涯,河出書房.
- 今泉 篁洲(1909)伊東七十郎 上,仙台新聞社.
- 今泉 篁洲(1909)伊東七十郎 下,仙台新聞社.
- 北影 雄幸(2013)男の風格「山本周五郎」を生きる,勉誠出版.
- 小池 忠雄(1945)或る志士之生涯,河出書房.
- 篁洲 漁史(1909)伊東七十郎,仙台新報,第 34 号,7 月 31 日,10-11.
- 三原 良吉(1975)宮城の郷土史話,宝文堂.
- 三原 良吉(1971)仙台郷土史夜話,宝文堂.
- 三原 良吉(1967)伊東七十郎の忠死,振興相互銀行.
- 村上 信 (1928) 原田甲斐, 玉井清文堂.
- 村上 浪六(1979)人間学,五月書房.
- 内藤 弓繭記(1918)伊東重孝二百五十周年忌法要記,伊東七十郎, 斎藤莊次郎編,67-88.
- 作者不詳(1982)伊達騒動 (上) 原本現代訳(35), 須知徳平訳, 教育社.
- 作者不詳(1982)伊達騒動 (下) 原本現代訳(36), 須知徳平訳, 教育社.
- 大池 唯雄(1970)炎の時代 明治戊申の人びと,河北新報社.
- 大池 唯雄(1967)史談セント・ヘレナの日本人, 朝日新聞社.
- 大槻 文彦(1970)伊達騒動實録 (上・乾ノ巻),名著出版.
- 齋藤 莊次郎(1970)先代萩実話,金港堂.
- 齋藤 莊次郎(1931) 伊東七十郎の忠節, 斎藤莊次郎先生後援会編,亀山耕治(斎藤莊次郎先生仙台放送局に於て放送).
- 齋藤 莊次郎(1918)伊東七十郎.
- 作並 清亮(1888)伊達氏史料,伊東七十郎伝書抜,5 輯 144 卷.
- 佐藤 隆信(1984)山本周五郎 新潮日本文学アルバム 18, 新潮社.
- 柴田町編さん委員会(1992)柴田町史通史篇Ⅱ,柴田町.
- 柴田町編さん委員会(1989)柴田町史通史篇Ⅰ,柴田町.

清水 きん(1988)夫 山本周五郎,福武文庫.

Takahashi,R.(2017) Gerontology is my life and your life Japan Hokkaido Kitami 2020 Vision with Philosophy of Applied Gerontology, Odisha Journal of Social Science,Vol.4(2)95-104.

内田 樹(2013)修業論,光文社新書.

上山 智身(1985) 無刀流開祖山岡鉄舟居士の剣道理念と真髓, 駒澤大学保健体育部研究紀要 7, 44-60.

山本 周五郎(1998)人は負けながら勝つのがいい,学陽書房.

山本 周五郎(1969) 樅ノ木は残った,講談社.

山本周五郎展連絡事務局(2003)曲軒作家生誕 100 年記念聴く、観る山本周五郎の世界展, 仙台文学館.

#### <注>

注1 山本周五郎「樅ノ木は残った」講談社(1969)のなかで伊東七十郎の名前が登場する頁は以下のとおりである。9,15,238-244,387-410 頁.七十郎辞世の句 409-410 頁.

注2 山本周五郎「樅ノ木は残った」講談社(1969)のなかで、樅ノ木について触れている箇所は、30-33 頁。「雪はしだいに激しくなり、樅ノ木の枝が白くなった。空に向かって伸びているその枝は、いま雪を衣て凜と力づよく、昏れかかる光の中に独り、静かに、しんと立っていた。『一おじさま』宇乃はおもいをこめて呼びかけた。すると、もみの木がぼうとにじんで、そこに甲斐の姿があらわれた。山本周五郎『樅ノ木は残った』より 清水きん書」(509 頁; Fig.8)

注3 週刊新潮(2013)「山本周五郎」生誕 110 年全集刊行記念 息子が見た親父の背中 特集 作家の背中,第 58 卷 25 号,通巻 2897 号,7 月 4 日,46-53 のなかで生涯、賞を拒み続け(直木賞を含み) 記念石碑をつくる打診があったときにはハンマーを持ってぶち壊しにいくともご子息に語っていた。

注4 裁松院住職目黒耕道氏によると伊東が伊藤となっているのは、大切に守るための手段として表記されたことが予測される。

注5 仙台文学館編(2014)大佛次郎 大池唯雄 往復書簡集の中で大佛次郎氏が、大池唯雄氏の才能を高く評価していることに対して、直木賞の受章に際しても頑なに辞退の意を示した大池唯雄氏とのやり取りが誌されている。大池氏は郷土に留まり地元の公民館長として働きながら執筆を続けと大佛氏への交友関係を続けた。展 第三号 特集「大池唯雄・濱田隼雄 郷土に生きる」より [http://naokiaward.cocolog-nifty.com/blog/2008/04/post\\_f6bf.html](http://naokiaward.cocolog-nifty.com/blog/2008/04/post_f6bf.html)

あけがらすはや  
暁鳥敏とラビンドラナート・タゴールの著作

「ひと MAN」における

ジェロントロジー哲学の比較研究と今後の課題

たかはし りょう (仙台大学)  
高橋 亮 (仙台大学)

要旨

本稿は、ジェロントロジー哲学の探求自体がひとの価値の探求に密接な関わりがあり今後、さらなる「ひと」の価値観の探究をとおして具体的なジェロントロジー哲学の構築の可能性を試みたものである。文献研究とともに実際にタゴール翁の講演が実施されたインドのヴィシャカパトナムに所在するアンドラ大学をはじめとする現地調査並びにタゴールの住んでおられたコルカタおよびサンタニケタンでの現地調査を実施した。また暁鳥敏先生に関する全集 28 巻をはじめ関連文献実証研究とともに金沢大学附属図書館に赴き暁鳥文庫(約 55,000 冊蔵書)の中からとくに暁鳥敏氏がタゴール翁との謁見に関する日記、タゴールからの直筆のメッセージおよびインド佛蹟巡拝記のオリジナル版と全集第 23 巻との比較研究を実施した。並びに暁鳥敏先生の実家である明達寺での聴き取り調査を実施してきたことをまとめたものである。この中で共通して理解したことはジェロントロジー哲学とは一人一人が自らの人生の経験を通して構築していくものであり、それらを応用する能力を養うこと自体がジェロントロジー哲学の存在であるということである。

和文キーワード：暁鳥敏 ラビンドラナート・タゴール ジェロントロジー 哲学

I.はじめに

2019(令和元)年 6 月に石川県野々市の歴史研究家・堀川惇夫先生より彼の草稿と共に一冊の本が届いた。その表紙には「白山ふるさと文学賞第三十四回暁鳥敏賞入選論文」と記されていた。白山については昨年、「<sup>いにしえ</sup>古から学び未来へと向かう福祉の課題：「船岡」の歴史から学ぶ一考察」と題して白山信仰と菊理姫と船岡山についてまとめて関心をもっていた<sup>1)</sup>。その文章の始まりは、「日本には JR「船岡駅」が二つある。」から始まり、一つ目の駅は山本周五郎著作 NHK 大河ドラマ「縦の木は残った」の舞台となった宮城県柴田郡柴田町にある東日本旅客鉄道 (JR 東日本) 東北本線の駅」でここが仙台大学の最寄り駅である<sup>2)</sup>。二つ目

の駅は京都府南丹市にある西日本旅客鉄道（JR 西日本）山陰本線の駅である。柴田町教育委員会発行の「しばたの歴史ガイド」の裏表紙には『柴田町には何もないと言われているが・・・文化財について調べれば調べるほど、ミステリアスな町であることが分かる』と記されている<sup>3)</sup>。さらに「船岡」という地名について調べてみると宮城県柴田郡柴田町船岡、京都府京都市北区紫野南舟岡町そして石川県白山市八幡町船岡山城跡が存在している。京都府と石川県の二つの船岡に共通しているのは、伊達政宗や豊臣秀吉が尊敬していたといわれる織田信長の崇敬する白山信仰が関連している・・・これが筆者と白山との関わりの始まりであるとまとめた。筆者は末日聖徒イエスキリスト教会(The Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints)の会員として18歳で入信して以来、日本を含む国々の様々な宗教との関わりを教義のみならず個々の人々との交流とのなかで学んできた。そこで学んだことは宗教に所属していくこと自体がその宗教の教義を物語るものではないということである。キリスト教を母体としながらもあらゆる主教的なバックグラウンドをもつ国民で構成されるアメリカ合衆国に家族を伴った学生・大学院生として約6年在住の生活の体験はもとよりインドに在住した1年間はアメリカでの6年の生活にも匹敵する程の深い哲学的な人生経験であったと回想する。そのような人生体験のなかで改めて日本の文化や歴史および宗教をみつめると新しい発見を通して気づくことがある。縁あって2018年8月に石川県白山市能美市の麓に所在する北陸先端科学技術大学院大学(Japan Advanced Institute of Science and Technology: JAIST)で開催された国際会議での講演に招待された際に開催主催者の飯田弘之教授に白山神社の案内を頂いた。そこで前述のように菊理姫の存在を知り船岡との関わりを学ぶこととなった。同大学院は先見の明をもった松崎従成(前辰口町長)<sup>4)</sup>と森喜朗(元内閣総理大臣・現東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長)<sup>5)</sup>らが尽力し1990年に開学した経緯が単に大学誘致の目的で設立されたのではなくJAISTの学歌にあるように「**霊峰白山に守られて学府の理想を追い求め 進取の気性で世界に灯をと**もせ」という歌詞の中に学問の哲学が含まれた中での産物である感じたことにある<sup>6)</sup>。今後の自らの人生哲学の構築のためにも、白山の麓で生まれ育った暁烏敏の存在を知り、彼の人生を学ぶことは、筆者自身の人生に大きな意義があると考え本稿を纏めたことが事の次第である。

## II. 朴沢学園・仙台大学の歩み

現在筆者が所属している仙台大学は1967年に開学し、建学の精神を「実学と創意工夫」と掲げ五十周年を迎え2017年に「仙台大学歴代学長の歩み」として歴史をまとめた<sup>7)</sup>。その際に、本学創設者である朴沢一郎の日本教育心理学会での発表タイトルに目が止まった<sup>8)</sup>。



そのタイトルは、「青年とスポーツと宗教」であった。要約すると次の内容が記されている。「現在私が授業している体育系の学生に対してスポーツと宗教の関連というテーマで講義を行っているが、その限りにおいては宗教に対する彼等の関心は極めて低いようである。宗教々育は戦後学校教育から追放され家庭教育においても疎遠にされた慣行が如実に現れてきたと見るならば何ら不思議はないといえる。しかし体育学の領域において学校教育とやらんで社会体育の重要性が急速に認められつつある趨勢は健康美の増進という今日的課題としてのレクリエーションとか心身障害者に対するリハビリテーションの如き課題が解決をせまられていることを銘記するならば、未来に向かって聖という宗教的価値の追求がスポーツの世界にも訪れてくるであろう」という内容である。この内容を読んだときに筆者は、朴澤一郎が建学28年後に朴澤泰治(仙台大学理事長・学事顧問)がリーダーとして健康福祉学科が創設され、これを皮切りに運動栄養学科、スポーツ情報マスメディア学科、現代武道学科、そして子ども運動教育学科を含む六学科において実学と創意工夫による人材が育成されるという今日の予見を感じた<sup>9)10)11)</sup>。そこで朴澤についてさらに調べていると、大阪教育大学の岩田文昭教授が近角常観の書簡を整理している一覧リストの中に朴澤一郎の書簡がリストの中に出てきた。そこで内容をみてみると、1939(昭和14)年7月14日付けの書簡に仙臺の自宅から東京帝国大学に隣接する学生寮「求道会館」を主管する近角常観・夫人宛に丁寧な文章が記されていた<sup>12)</sup>。その一節に「一学期中は有難き御教示を賜はり種々と御心配御配慮を添うし、我が儘に打ち過ぎ候へども、御陰様にて大過なく送り得候段、誠に感謝の他無之候 謹んで御禮申し上げ上致ししばらくお邪魔申し上げます候・・・」と感謝の意が記されていた。この手紙を読んだときに朴澤一郎が学生時代に最も感化された人物のひとりが近角常観であったのではと直感したのであった。そして書簡の裏には「仙台市良覚院丁一朴澤一郎 七月十四日」と記されている<sup>13)</sup>。良覚院とは、陸奥国仙台(宮城県仙台市青葉区片平)にあった伊達家ゆかりの修験道本山派の寺院である。とくに、良覚院を開山した栄真は役ノ行者の流れを汲む修験道即ち本山派の修験で、その先祖時代から修験として伊達家に仕えており、常にお咄相手相談相手として、機密の事にも参与されていたとされている<sup>14)</sup>。その後、そのような歴史的背景のある跡地に仙台大学の教育の原点ともいえる朴沢学園の始まりである松操裁縫私塾が、1877(明治十年)に開塾された場所であることが分かった<sup>15)</sup>。朴澤家の歴史を遡ると以下のようなになる。松操裁縫私塾創設者である朴澤三代治の生家の直系子孫である朴澤由雄宅には鎌倉から江戸中期までの詳細に記された系図や代々伊達家から与えられた安堵状が大切に保管されてきた。それによると「朴澤氏は、武蔵国大河戸氏の出で、文治五年(1189)奥州合戦の功により宮城郡山村郷の地頭職を得た。山村郷は現在の仙台市泉区朴沢・根白石・七北田などである。大河戸氏は、高柳、山村と名乗ることもあった。朴沢の名字は南北朝時代から現れる。現在の泉区に残る地名にちなむものである。

そこで仙台市泉区朴沢地区の寺院を調べると<sup>ほうたくさんこうぜんいん</sup>朴沢山興禪院(宮城県仙台市泉区朴沢字南 61)に朴澤家の歴史があることが判明した<sup>16)</sup>。本寺は「本尊を釈迦牟尼仏とする寺である。1461(寛正2)年ごろに創建されたと伝えられているが、もともとは天台宗であったとされている。本寺は、1527(大永7)年に朴澤の地頭であった朴澤加賀守が曹洞宗に改めて開山したことから、朴澤加賀守の木像がまつられている。現在の建物は、1809(文化6)年に全焼したことから、翌年建て替えられたものである。」。興禪院朴澤家の墓標には、以下のように刻まれている。「朴澤城主 加賀守之墓 当寺は藤原釜足公七世藤原秀郷(生年不詳~991)の子孫で加賀守九吉重永の墓である。寺山より延宝三年現在地に移し、朴澤家の氏寺として建立し、朴澤興禪院と号す。同年朴澤八幡神社を神として祀る。重永が寺に供米料として山林三町歩、田地八反歩寺の境内地三百坪を給し開基となる。同寺の虚空蔵菩薩を守護佛とし、大坂夏の陣に参戦、帰還と同時に重永の自画像を彫り共に安置した。延宝八年三月二十六日重永享年九十二歳にて没す。院号法岩柳正居士を銘す。明治となり神社仏閣は神社庁の支配となり現在に至る。平成十四年吉日 朴澤とみよ九十二才 合掌」。藤原秀郷の歴史的な役割は1080年前の平将門の乱(935年)の鎮圧をしたことで知られ、東国武士の弓射騎兵を含む武芸故実の祖とされているのはその由縁である<sup>17)</sup>。これらは今日、室町時代に創作された「近江三上山の百足退治」(俵藤太絵巻)や歌舞伎をとおして伝承されている。朴澤家の歴史を振り返った上で朴澤一郎氏が学生時代に感化を受けた近角常観について確認したい。

### III. 近角常観先生について

<sup>ちかづみじょうかん</sup>近角常観(明治3年4月24日(1870年5月24日) - 昭和16(1941)年12月3日)は、真宗大谷派西源寺の住職であるとともに、東京本郷の求道学舎と求道会館において学生・知識人に感化を与えた宗教哲学者である。『<sup>なんにしゅう</sup>歎異抄』を中心として、親鸞の精神を説く。

『政教時報』『求道』『信界建現』を創刊して、信仰の普及に努めた。東本願寺経営の育英教校で学び、生涯の師と仰ぐことになる<sup>きよざわまんし</sup>清沢満之と出会うことになる<sup>18)19)</sup>。近角常観はアインシュタインが日本を訪問された際に仏教について知りたいということで対談された御仁である。その対談の中で、アインシュタインが「仏さまとはどんなお方ですか」との質問に対して常観は「姥捨て山」にまつわる伝説を例にあげて説明されたのであった<sup>20)21)22)</sup>。すなわち「生きがい」という日本独自の言葉の中には、目にみえない「思いやり」や「労り」を含む「気づきの文化」が内在し、行動の内面にある思いやりが、ひとに知られず無私の精神で施されるということも含まれているということである。しかしながら、この文化も日本のオリジナリティというのではなく、実際には無限の宇宙を包括する全人

類の生きる上で欠くことのできない「生命（気）の文化」であることも含まれているのである<sup>23) 24) 25)</sup>。清沢の弟子たちの多くは、真宗大学（現 大谷大学）の私塾「浩々洞」において薫陶を教授し合い教育の価値観を受容した。その中でも暁鳥敏は「宗教は心霊の実験に立つ。亦実験よりせざるべからざるにあらずや」という信条を表明している<sup>26)</sup>。

#### IV. 暁鳥敏先生について

暁鳥敏<sup>あけがらすはや</sup>は（1877(明治10)年7月12日 - 1954(昭和29)年8月27日）は、真宗大谷派の僧侶であり宗教哲学者である。高浜虚子<sup>たかはまきよし</sup>に師事し、詩や俳句も多く残している。また同じ加賀の藤原鉄乗<sup>ふじわらてつじょう</sup>、高光大船<sup>たかみつだいせん</sup>と暁鳥敏を合わせて加賀の三羽鳥といわれている<sup>27) 28) 29)</sup>。暁鳥敏は1877（明治10）年、石川県石川郡出城村字北安田（現白山市北安田）真宗大谷派の明達寺<sup>みょうたつじ</sup>に長男として生まれた。父の暁鳥依念<sup>えねん</sup>は説教使として知られた人物であり母の千代野も、清貧であっても夫に尽くし、敏の教育に熱心な母であったと知られている。暁鳥の哲学は次の和歌の中にすべて網羅されているといっても過言ではない。「十億の人に十億の母あらむもわが母にまさる母ありなむや」と。全ての人類は母親の存在があって人として成長するのであり、母親の役割は人類の役割の中で最も重要な「母子愛」がこの和歌に込められているのである<sup>30)</sup>。これらの教えの基本は、親鸞<sup>なんにしょう</sup>の歎異抄から来ているものであり生涯の親鸞の学徒であったともいえよう<sup>31)</sup>。また、暁鳥敏の生涯の哲学は、汝<sup>にょ</sup>自<sup>じ</sup>当<sup>とう</sup>知<sup>ち</sup>すなわち「真実の教えを伝える者は、おのれ自ら命をかけて、その術<sup>すべ</sup>をしらなければならない」と皆<sup>かい</sup>当<sup>とう</sup>往<sup>おう</sup>生<sup>じょう</sup>（皆<sup>かい</sup>まさ<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>往<sup>おう</sup>生<sup>じょう</sup>すべし）の二つに集結することができよう。また明達寺の梵鐘には、四つの和歌が鑄込まれている。その中でも代表的な二つの和歌は、「生と死のうねりをなして常住<sup>とことわ</sup>のいのちの水の 流れゆくなり」「はて知れぬ 空のま中を太陽は 輝きながら 静々とゆく」である<sup>註1)</sup>。暁鳥敏について、とくに取り上げようとした理由は、1927（昭和2）年12月13日にインドに訪問してタゴールと面会していたことを知ったことと、1950(昭和25)年に「人」という題目の小冊子と出会ったことにある。そこでタゴールと筆者との出会いについて紹介したい。

## V. 暁烏敏とラビンドラナート・タゴールとの出会い

暁烏敏(1877-1954)が50歳となった1927(昭和2)年1月13日に印度のタゴールの学校を暁峻康範<sup>てるおかやすのり</sup>と訪問しタゴールにも面会していることが記載されている。その部分の日記は以下のとおりである。「タゴール翁の学校は、小学校から大学まで連続に学ぶことの出来る学校で、生徒が130人あるということである。教授には、シャアスリーの如き世界的の梵語学者もあり、欧州人も2-3人あるということである。茶を飲んでから校庭に出て、図書館の前に行くと、丁度そこから出てこられたのは、私たちがわざわざ訪ねてきた詩人タゴール翁である。茶色のガウンのようなものを纏<sup>まと</sup>って柔らかな品の良い顔をした老人である。……背の低い形ばかりの門に入って、一階建ての石造の家の玄関に立った。秘書らしい人が詩人に通ずるとタゴール翁はにこやかに玄関に迎えられた。……席が定まるとあの鈴のような優しい声で、先ず最初に、天皇陛下の崩御<sup>ほうぎょ</sup>についてお見舞をいい、どこで御かくれになったことをきいたかと尋ねられた。それから、日本に二度行った。日本はよいところだということを始めにして、滾々と当代の文明について三、四十分語られた。要するに西洋の文明は狭く窮屈な機械的なものだから、東洋は広々とした精神的なものであるとっておられた。」と紹介している<sup>32)</sup>。その際に、暁烏敏先生は、歌を詠んだ。「山をうねりていや高く雲の中ゆくヒマラヤの道」これの英訳は、Round mountain, Round mountain, Go up, go up, Through cloud, Oh Himalaya Road!と訳した。タゴール翁は鉛筆を執って暫時打案<sup>ざんじうちあん</sup>じつこれで結構であると言われた。

## VI. タゴールの生涯とアンドラ大学訪問の証人との出会い

タゴールは1861年5月7日、ベンガル州カルカッタの名門タゴール家に七人兄弟の末っ子として生まれた。タゴール家はタゴールの祖父デーヴンドラナート・ダゴールの代にカルカッタ有数の大商人として成長を遂げた家であり、また父のデヴェンドラナート・タゴールも宗教家として著名であり、ヒンドゥー教改革運動(英語版)のひとつブラフモ・サマージのトップを務めていた<sup>33)</sup>。ラビンドラナートは生まれながらにブラフモ・サマージの会員だったが、その活動はごく一部のエリートのものに過ぎず、一般大衆の宗教心と乖離していると感じた。幼い頃より詩作を能くしたが、イギリス流の厳格な教育に馴染めず、3つの学校をドロップアウトする。1878年、17歳でイギリスのユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)に留学、一年半を過ごす卒業には失敗した。イギリス留学でそれほど得るところはなく、家の中では相変わらず冴えない存在だった<sup>34) 35)</sup>。後半生におけるタゴールは自らの学園を作る構想を持つようになり、父のデーヴェンドラナートが道場を開いていたカルカッタの北西にあたるシャーンティニケートンに1898年から校舎の建設をはじめ、

1901年に野外学校を設立した。その後、この学校は1921年には大学となり、1951年にはインド国立とされて現在のヴィシュヴァ・バーラティ国立大学となった。1913年、タゴールはアジア人として初のノーベル文学賞を受賞した。

筆者とタゴールとの出会いは、インドにおいて国際ジェロントロジー会議を開催準備するために妻と娘2名を伴い2008年8月20日から2009年6月12日までにインド・ヴィンヤカパトナムで生活をしてきたことに遡る。この内容については、拙著が「ラビンドラナート・タゴール著 MAN ひと」と題して出版している<sup>37) 38)</sup>。

2008年10月13日に筆者はパーティレンタル店のギリダ・チ社長のお店にふらっと訪問し何気ない会話を始めた。チ社長が日本の歴史に関心があって、小さい時に日本の貿易船がヴィンヤカパトナムに来ていたときに船員に親切にしてもらったお話をしてくれた。そしてタゴールがヴィンヤカパトナムにも訪問されて当時の学長のラダクリシュナンと一緒に写真をとっているスクラップもみせていただいたが、アンドラ大学に何を目的にこられたのかは分からなかった。アンドラ大学でのタゴールの講演内容を探したところ、1937年「MAN」というタイトルで本が出版されていることが判明した<sup>39)</sup>。この本の75ページの説明には以下のようにある。「この本はアンドラ大学において1933年に行われた3つの講義が含まれている。最初第一の講義「人」は各個人の中にある永遠なる人についてである。第二の講義は「最も親密な気づきの直接の対象」また「完璧の後に人を鼓舞する」「優れた人」についてである。第三の章は「私は彼である」は、「我々の考えや行動の中にある神聖な人」についてである。タゴールを、アンドラ大学に招待したのは、2代目学長ラダクリシュナン（初代副大統領後に2代目インド大統領）で、インドのみならずケンブリッジでも哲学研究、教鞭に携わったつながりによるものであった。タゴールがアジア人で初めてノーベル賞(1913)を受賞して20年後にあたる1933年にこの講義の準備にかかった時は、既に72歳であった。ラダクリシュナン学長が、タゴールに講演の依頼をするにあたって、1932年9月23日の手紙の中で、招待に感謝する一方で、多忙な毎日の生活と高齢による健康の限界を感じ、一度ことわりの手紙を出している。しかし、ラダクリシュナン学長は、再度の依頼の手紙で、この依頼は単なる学生へのメッセージではなく後生に残るメッセージをお願いしたいという内容の手紙を出している。それが実現し「ひと Man」という著書として存在しているのである<sup>40)</sup>。

タゴールのアンドラ大学での講演について調べると、1933年と1934年に二度アンドラ大学の所在するヴィンヤカパトナムに訪問していることが判明した。一度目は、アンドラ大学での講演（1933年12月8,9,10日）、2度目はタゴールが運営している大学への支援を依頼するためにジェプール・マハラジャへの面会であった。その詳細を知るために地域の歴史に詳しい長老コルル・ジャカダハ・ラオを尋ねた。ラオは、タゴールが、アンドラ大学に来たことに関する雑誌記事と写真のコピーをくださった。次に、この写真の出典を探すべく、当時94歳現役のテルグ語雑誌編集長コンデプリ・スバ・ラオを尋ねた。その結果、マーティが、その写真に写っていたお世話係の学生であることが判明した。過去の購読者リ

ストからマーティ氏の住所を探して頂くことができた。そこで、直ちに、連絡をして出かけると、1 度目は留守であったが近所の隣人からマーティは、去年の末に亡くなったことをお聴きした。2 度目の訪問では、マーティの息子の夫人にお会いでき雑誌と同じ写真が額にいられて飾られているのを確認できた。3 度目の訪問で、マーティのご子息であるカリダスにお会いすることができ、貴重なお話を伺うことができた。タゴール翁がアンドラ大学を訪問された際に、アンドラ大学で最も信頼のおける学生であるマーティに宿泊の見張りを任された。最終日に、いつもマーティが部屋のドアの前にいるので、タゴール翁が、いつ休んでいるのか尋ねたところ「ご主人様、私は家には帰らず、ずっとここで役割を果たしております」と応えたところタゴール翁は、「こんなに忠実な学生はみたことがない。あなたの願いを聴いてあげよう。何を望みますか？」と尋ねたところ、マーティは即座に「学長と写真撮影をして頂けましたら幸いです」と応えた。マーティ氏 (1912-2008) は、教育者として、またアンドラプラディッシュ州初のボーイスカウトマスターとして社会に一生涯貢献された<sup>41)</sup>。存命中は、いつもタゴールの経験について話されていた。その後、イラ・ラオ・アンドラ女史にお会いして、当時わずか4歳であった時の思い出話をしてくださった。ラオ博士の父セイルスワン・チャンド教授が、当時の哲学学部の教授で、タゴールが宿泊していたジェイプールマハラジのお宅に訪問したことや、タゴールの大学のあるサンティニケタンから学生を引率してドラマを披露した時に、アンドラ大学の学生らが、ベンガル語で発表して長くて騒々しくなったことに対して憤慨してステージに座っていたタゴール翁が、真っ赤な顔をして即学生の発表を取りやめて退散させた。そしてラダクリシュナン学長が、大学を代表して謝罪したことなど鮮明に覚えていることを回想し話してくれた。これらの経験をもとに筆者は、タゴールの設立した大学 Visva-Bharati でさらなる「MAN」に関する調査を行うために2009年6月3日にコルカタへ赴き、翌日サンティニケタンへ電車で行った。そこでお会いしたのが、モヒト・チャクラバルティ教授とタゴール博物館のニランジャン・バネルジー氏であった。チャクラバルティ教授には、その後タゴールの教育哲学を基においたジェロントロジー教育について筆者がまとめていた雑誌に投稿しタゴールの教育哲学についてまとめて頂いた<sup>42)</sup>。

## VII. タゴールと著書「MAN ひと」

アンドラ大学でのタゴールの講演内容を探したところ、1934年に<sup>註2</sup>「MAN」というタイトルで本が出版されていることが判明した<sup>38)39)</sup>。タゴールの教育哲学を具現化するにあたり、タゴールの教育の目標を12項目にまとめたものがある。それらは以下のとおりである<sup>43)</sup>。

- (1)人間の完成 (Perfect of Man)
- (2)真理を一つに結び合わせる (Unity of Truth)
- (3)知的、身体的、および霊的生活の調和 (Harmony Between Intellectual Physical and the Spiritual Life)



- (4)道徳的教育 (Moral Education)
- (5)東洋と西洋の調和 (Harmony Between East and West)
- (6)創造的教育 (Creative Education)
- (7)利己認識 (Self-Realization)
- (8)総合的発達 (Integral Development)
- (9)身体的発達 (Physical Development)
- (10)精神的発達 (Mental Development)
- (11)環境との調和 (Harmony With Environment)
- (12)生きがいを得る (Earning Livelihood)

以上の事柄を包含して凝縮するその内容が、「MAN」の中に次のような言葉で表現されているので紹介したい。「永遠の人は、人間社会における人の命の限りある中で表現されなければなりません。人はこの考えを自分の行動の中につなげなければなりません。それで、イサウパニシャッド 28 は「あなたは 100 年間生き、行動しなければならない。」と語っています。100 年の人生を仕事によって成し遂げなさい。それは本当に、信念と結果を通して「私は彼です」という真実が表現できているような主張ができる仕事（天職のこと）です。上っ面を見て、息をひそめて座り、人から離れていては、私たちはこの真理を獲得しえません。」<sup>44)45)46)</sup>

このメッセージからこの著作はまさしくジェロントロジーの哲学書と確信したのであった。このような学びをしていたところ、暁烏敏について調べていた時に、暁烏敏著「人」という本をヤフーオークションで見つけたその瞬間、何かの運命的な導きに違いないと直感し即購読した。

## VIII. 暁烏敏と著書「人」

暁烏敏の「人」は三度に渡って出版されている。初版は、中外出版、次の版は崇信学舎刊そして最後の版は、暁烏敏全集の第 16 巻である<sup>48)49)</sup>。初版の序には以下の記載がある。「『中外日報』第八千號の記念として、八人の方から八十頁馬宛のパンフレットを書いて貰ふことにしたから、君はその一人として何かかいてくれといふ涙骨さんからの手紙を六月の一日に呉市で見た。承諾の旨をかいてあげた。六日の朝、歸宅したが金澤の講演會などで、宅にゐるうちに書く暇もなく十一日に旅に出た。先ず長岡市外の撰田屋に着いてから書き上げて、新潟、<sup>あつみ</sup> 温海、本莊の三箇處で講演やら揮毫やらせわしい中に筆を執って、<sup>ようや</sup> 漸く此依頼の通りの枚數に隨筆を書きつづいた。近來文を草するには口授して書いて貰うてみたが、今度は珍しく自分で毫筆を執って書き了つたのである。これは近來珍しいことである。大正十五年六月二十二日 秋田縣本莊町にて 暁烏敏」とある。すなわち暁烏敏先生は、この草稿を新潟県撰田屋町、新潟市、山形県熱海温泉そして秋田縣本莊町の 4 カ所で纏めたものが「人」としてひとつに纏められている<sup>註2)</sup>。この項では暁烏敏の作品「人」についての考察を試みたい。本稿の「人」のはじまりは「愛」について次の文章から始まっている。

「万物の中でいつちすきなのはやはり人だ。人の中で最もすきなのは自分だ。その自分がいやになってくると、すべての人がうるさくなり、万物<sup>ばんぶつことごと</sup>悉くがうるさくなってくる。・・・

人は万物の霊というのは、人が万物の中で最も尊いというのではなくて、万物の生命だというのだ。人は万物の霊であって自分は万人の霊である」と。この中で教えているのは、人は一人ひとりが尊く大切な存在であるということを見せている。以下に「人」の中でとくに筆者に心に止まった内容を筆記したい。「愛しぬくものは失恋はない。失恋する者は所有欲にかられ、愛に徹しないものたちのものに多いようである。・・・自分が彼を愛する。その愛は彼の自分への愛に動き出したものだ、信ずることのできる者は常に疑うことなく、全身愛に燃ゆることができる。・・・」愛の次に取り上げられている内容は「死」である。暁鳥敏氏は「死」について「死の解決は死なり。常に死を念ずれば死の解決は自然に来なり。死の上につた者は無<sup>む</sup>畏であり、無<sup>む</sup>碍であり、無<sup>む</sup>欲であり、無<sup>む</sup>瞋であり、亦無我である。」と記している。「死」の次に暁鳥は「旅」を通しての人との関わりについて次のように纏めている。「私は旅が好きだ。去年の暮れに計算してみたら丁度百八十二日旅にねて百八十三日家にねた。本年はもっと旅に出るようになっておる。家におっても楽しいし、旅に出てもうれしい。家庭もすき、旅もすきなのだろうと思う。・・・私は来いという人の処でなければ行かぬ。来いと、いうても私の好まない人の処へは行かぬ。だから私はどこへいっても我が家のような気がしておる。・・・旅に出るといつも新しい知識を得てくる。その道に実際携わっておる人々にあうて、その真剣の話をきくことによって、読書に劣らぬ利益を受けるようである。旅中にすきな読書はできないけれど、それに代わるだけの教訓は確かにある。到る処に善知識を訪ねた善財童子の心がなつかしく思われる。人間到る処青山あり、人間到る処善知識がある。首をたれて聴くべき人がたくさんある。」ここには、「可愛い子には旅をさせよ」という意味も含まれている。旅は経験を通しての「実学」の大切を教えてくれている。次に暁鳥敏は「芸術」について述べている。すなわち「芸術はこしらえたものであってはならぬ。生まれたものでなくてはならぬ。人間至奥の発露でなくてはならぬ。やはり自然は最も偉大なる芸術である。・・・よい絵を見るのもうれしい。善い字を観るのもうれしい。よい絵を見、よい字を見ると、よい本をよんだと同じ感化を受けるものだ。」と。最後に取り上げられている内容は「リーダーシップと教育」についてである。リーダーシップについて暁鳥は「あまり敏感で、鋭い頭脳を持つ者は人の長となる者はちと鈍感なところがなくてはならぬ。敏感なところがなくてはならぬ、敏感であって而もその鋭鋒を包むほどに円満になった人なら申し分はない。とに角人の長となる人は、自分の意見を通そうしないで如何に人の意見を総て通してやろかと云うことを考えなくてはならぬ。人の長たる人は、能く聞くことに努めねばならぬ。語るより聞くことが大切だ。多くの意見を聞いてその一つ一つに深い洞察をなし、その統一点を発見して、自分の心中に大衆を統理するようであればならぬ。」

ぬ・・・よい校長とは生徒のする事によく習う人である。」<sup>50)</sup>。このことに付随して、人は常に「**チャレンジ精神**」をもつことも重要であると述べている。「何でもよいから思い切ってやってみたまえ。思い切ってやると行き詰まることがある。行き詰ると其処から新しい門が開ける。ぶつかって行かなくちゃ何時までも開かれる事はないものだ。」と記されている。最後に暁烏敏は、「学ぶこと」の重要性について「色読という語もよい語である。体験という語もよい語である。」と纏めている。これらの7つ特徴が人がより「ひと」らしくなるための特質と方法であると理解することができよう。

## IX.おわりに

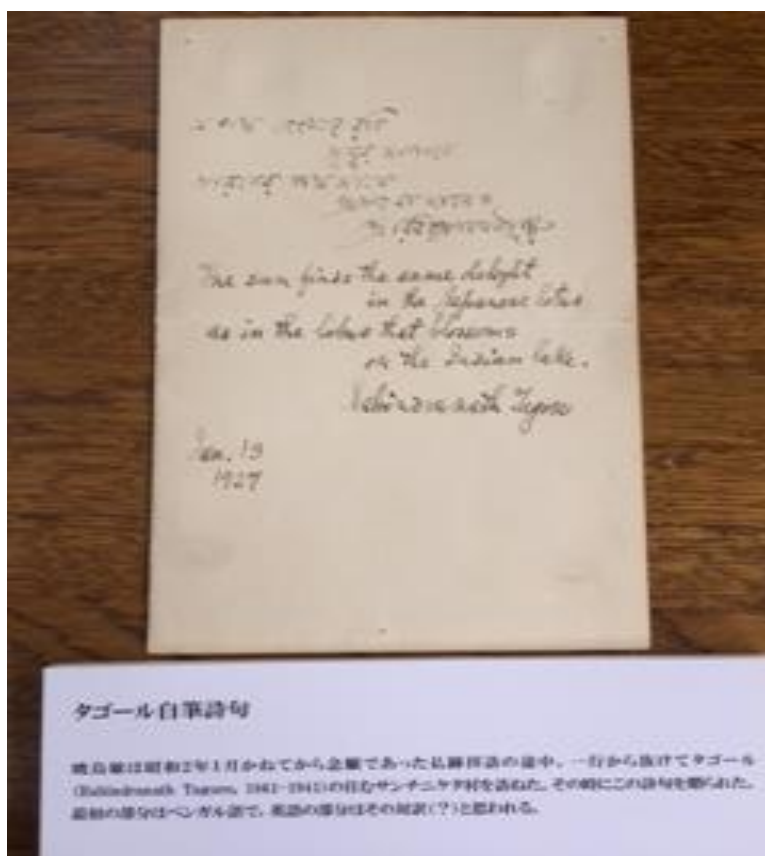
本稿は、仙台大学の所在する船岡から始まり仙台大学創設者朴澤一郎の青年時代に感化を受けた近角常観からの学びを通して暁烏敏の存在を知り、筆者がインドから帰国後翻訳監修して出版したタゴール著作「**MAN ひと**」の共通性の探求が環わとなって誕生したのである<sup>註3)</sup>。ジェロントロジーは、日本において老年学、長寿学、年輪学、老人学、福寿学、天寿学および創齡学など様々な呼称で呼ばれている。「ジェロントロジー」という語源は、イリヤ・メチニコフ (Ilya Ilyich Mechnikov, 1845—1916) が、1903年に著書「The Nature of Man: Studies in Optimistic Philosophy 人間の本质：最善説哲学の諸研究」のなかで「**研究の根底には、多方面から見た宗教的ならびに哲学的な根本思想をはじめとして、様々な言語や文化をもとに総合的に研究のアプローチをしたときに本当の人生や科学の目標を見出し、人々は一つの理想に向かってひとつになることができる**」と述べている<sup>51)</sup>。

ジェロントロジーは、一般的に「老年学」といわれているが、今日のジェロントロジー教育のなかには、幼児期から成人期に向けた生涯発達を学ぶことによって、自分の人生を構築する齡を創る「創齡学」という哲学を包含している実践的学問である。国連教育科学文化機関 (UNESCO) は2007年に「哲学を教えることと哲学の仕方を学ぶ: Teaching philosophy and learning to philosophize」に関する報告書を出した。そこでの理解をもとに、今後、日本人から見た人生観を日本における研究や歴史をとおして再検証する必要がある。それは、ジェロントロジー哲学の再検証にも繋がるからである。世界からこの哲学の再検証を検討する時に、教育から共育へのアプローチにも大きな影響をもたらすことになる。また、全生涯にわたるジェロントロジー共育・研究のアプローチの基盤をもたらすことにもなるであろう。今後の課題は、わが国のジェロントロジー研究においても同様である<sup>52)53)54)</sup>。日本老年社会科学会設立50周年を迎えて日本老年社会科学の役割に関して柴田(2009)は、以下のコメントを記載している。「老年社会科学会の会員の活動をみると、真に学際的なものは少ない。学際的という日本語の語源となっている Multidisciplinary と Interdisciplinary である。とくに Interdisciplinary という用語には学問の壁を取り払っていくというニュアンスがあ

るが、そのような研究はそれほど多くないのである。すなわち、社会科学会の会員の専門分野は多岐にわたっている点で「複数の学問体系が共同で研究を行う **Multidisciplinary**」ではあるが、「複数の学問体系の共同作業により、新たな知を共有する **Interdisciplinary**」であるとは必ずしもいえないのである。筆者がいつも気になるのは老年学会の学際的プログラムの聴衆のなかに本学会の会員がきわめて少ないことである。・・・人文学と科学はいわば二項対立的な関係にある。科学は測定でき、再現性をもつことが必要条件となる。しかし、人間にとって科学と同様の価値を人文学はもっており、哲学、文学、歴史学など、さらに心理学も分野によっては人文学に含まれる<sup>註4)</sup>・・・本学会の名称から文化（人文）の文言が消えたことは、否応なく本学会に大きな歪みをもたらすこととなった。当然のことながら人文学的な業績はほとんど発表されず、論文投稿は皆無に近い」と。学問のはじめは模倣を見ることや聴くことから始まり、様々な人々との出会いや読書・研究そして応用的実践による経験へのプロセスを経て学ぶものである。それらの知識の蓄えから応用できる力が養われ「知恵」とし普遍の力に到達しうると考えられよう。すなわち、ジェロントロジーとは目に見えない可能性を引き出しかつ見出し得る創造的要素を含んだ学問であると筆者は考えている<sup>55)</sup>。日本語の「宗教」という語は、幕末期に Religion の訳語が必要となって、今でいう「宗教」一般をさす語として採用され、明治初期に広まったとされている<sup>56)</sup>。原語の方の英語 Religion はラテン語の「religio」から派生したもので「ふたたび」という意味の接頭辞 re と「結びつける」という意味の ligare の組み合わせで、「再び結びつける」という意味で、「神と人を再び結びつける」という意味がある。したがって、「宗教」本来の目的は、「ひとの生命」が存在する中で「**人間の本質を理解すること**」の積み重ねであるともいえよう。そのためには、「頭脳」の暗記による「知識での理解」ではなく、「魂」による「悟り」が必要である。その媒介となる力が「祈り」や「禅」や「ヨガ」で得られる「瞑想による理解」である。筆者は、本研究を実施するにあたり、日本とインドの比較研究をするきっかけとなったのも、2003 年から毎年南インドを中心に訪問するたびに、「気づき」と「即興」の力を重んずる文化に何かを感じ、その何かを探求したいという思いが、比較研究に至ったともいえる<sup>57)</sup>。それは、昔の日本にあった文化が、西洋文化の影響のなかでその何かを失ってしまったことが背景にあるともいえる。筆者はこのような時代にあって、包括的学際的思想・哲学・信仰をもった人物が、この日本において存在していたことを暁烏敏全集第十一巻における「霊界の偉人」から理解を深めることができた<sup>58)</sup>。それは単に暁烏敏先生は自らの信仰する真宗大谷派の仏教の探求に留まることなくソクラテスをはじめ、日蓮上人、西行法師、法然聖人、マホメット、王陽明、芭蕉、善導、耶蘇キリストの教えから真理を究めた上で、さらに「死の問題」と題して死の研究を執筆されている点にある<sup>59)</sup>。本稿を終結するにあたりタゴールが、1916 年 5 月 1 日に土佐丸船上にて記した日記を引用して本文の結びとしたい。「宇宙最大の神秘は、見られるものにあるのではなく、見るひとのなかにある。この神秘は測り知ることができない。幾千年にわたって実験がされつづけている。起こりつつまた起こるかもしれない出来事のなかに、「見るひと」がそれ自身を試みつつある。私自

身の内にあるこの「私」は、他の多くの人のなかを歩きながら、日々にそれ自身を感じている。文学の最も豊かな要素は、ひとりの人と他の多くの人々とのあいだに実現される。一如の感情である。言い換えれば、見られたものでなくて、見る自己が目的である。」<sup>60)</sup>。おわりに、タゴール翁は暁烏敏との別れの際に、ベンガル語と英語にて次の詩を贈ってくれた直筆のメッセージが金沢大学図書館暁烏文庫（創設 1950(昭和 25)年）として約 5 万 5 千冊の貴重図書と共に保管されているので以下に紹介したい。

「The sun finds the same delight In the Japanese lotus, As in the lotus that blossoms On the Indian Lake. Rabindranath Tagore. Jan 13, 1927. すなわち、太陽はインドの湖の上に咲く蓮のように、日本の蓮の中で同じ喜びを見つける。」とある。<sup>61)</sup> 今後、我が国日本をはじめ世界の人々が自らの価値観を見出し、それを互いに尊敬し合える平和な地球国が築かれていくことを祈念し末筆とする。



金沢大学附属図書館寄贈タゴール氏筆詩句 1959(昭和 34)年 9 月 29 日 あけがらすふき  
暁烏 総

### 参考文献

- 1) 高橋亮. 古から学び未来へを向かう福祉の課題：「船岡」の歴史から学ぶ一考察,草の根

- 福祉 2018;48,11-21.
- 2) 山本周五郎. 樅の木は残った. 講談社. 1969.
  - 3) 柴田町教育委員会. しばたの歴史ガイド, 2017.
  - 4) 前坂武義(編). 炉端一人間松崎従成の生涯一. 故 松崎従成氏顕彰会, 1989.
  - 5) 森喜朗. 私の履歴, 日本経済新聞出版社. 2013.
  - 6) Takahashi R. Philosophy of Gerontology with Science and Technology: Personal View of Bioethics & Gerontology in Advanced Future,. HSOA Journal of Gerontology & Geriatric Medicine. 2018:1-19.
  - 7) 高橋亮. 仙台大学歴代学長の歩み Since 1967: Successive Presidents of Sendai University The Footsteps Since 1967. 仙台大学体育学部健康福祉学科高橋亮研究室. 2017.
  - 8) 朴澤一郎. 青年とスポーツと宗教 方法論 104. 日本教育心理学会発表論文集(第21回総会), 1979:56.
  - 9) 朴澤泰治. 健康福祉学科の創設と運営(回顧と展望). 健康福祉学科10周年記念誌, 仙台大学健康福祉学科開設10周年記念誌編集委員会. 仙台大学体育学部, 2006: 3-11.
  - 10) 朴澤泰治. 体育系大学による介護福祉士養成教育の妥当性の考察, 日本介護福祉士養成施設協会創立20周年記念論文集. 社団法人日本介護福祉士養成施設協会, 2011: 98-113.
  - 11) 高橋亮. 仙台大学体育学部健康福祉学科20周年の歩みと今後の展望. 仙台大学体育学部健康福祉学科20周年記念誌. 仙台大学体育学部健康福祉学科, 2016: 33-43.
  - 12) 岩田文昭. 近代仏教と青年一近角常観とその時代. 岩波書店, 2014.
  - 13) 朴澤一郎. 朴澤一郎書簡近角常観先生・御奥様宛, 1939: 7月14日付.
  - 14) 今泉寅四郎. 伊達世臣家譜卷之六. 仙臺業書刊行会, 1937: 181.
  - 15) 伊達宗弘. 朴沢学園の創始者朴澤三代治伝-近代日本女性の地位向上に大きく貢献. 丸善出版. (2015).
  - 16) 佐々木久(監修). 泉市誌下巻. 泉市編纂委員会, 1986: 249-250.
  - 17) 野口実. 伝説の将軍藤原秀郷. 吉川弘文館, 2001.
  - 18) 清沢満之. 宗教哲学散骨. 現代語訳, 藤田正勝訳. 法蔵館, 2002.
  - 19) 教学研究所(編) 清沢満之 生涯と思想. 東本願寺, 2004.
  - 20) 堀田了正. 5月法話会アインシュタインと仏教. 龍谷大学校友会会報, 2016, 第82.
  - 21) Rosenkranz Z. The Travel Diaries of Albert Einstein The Far East, Palestine & Spain, Princeton University Press, 2018.
  - 22) 杉本賢治訳・佐藤文隆. アインシュタイン日本で相対性理論を語る. 講談社, 2001.
  - 23) 三宅正隆. 近角常観の郷土における宗教活動とネットワーク 1) (上). 立命館国際研究, 2018; 31(2), 101-128. 2018.
  - 24) 三宅正隆. 近角常観の郷土における宗教活動とネットワーク (下). 立命館国際研究 2019; 31(3), 487-519.
  - 25) 高橋亮. ダ・ヴィンチ気かつくプロジェクト 2012 ジェロントロジー国際総合会議報告



- 書―「生きる力」を育むための共育のために. 日本ケアフィットサービス協会,2012; 157-168.
- 26) 碧海寿広. 哲学から体験へ:近角常観の宗教思想. 宗教研究, 2010; 84(1), 75-100.
- 27) 暁烏敏. 暁烏敏日記 上. 暁烏敏顕彰会, 1976.
- 28) 暁烏敏. 暁烏敏日記 下. 暁烏敏顕彰会, 1977.
- 29) 松田章一. 暁烏敏 世と共に世を超えん 上. 北國新聞社, 1997.
- 30) 碧海寿広. 教養主義者の救済論 読書家としての暁烏敏. 第二九回 暁烏敏賞入選論文. 石川県白山市, 3-16, 2013.
- 31) 下西善三郎. 宮沢賢治と〈まことの文学〉暁烏敏の需要を視野に収めて. 第二七回 暁烏敏賞入選論文, 石川県白山市.2011; 5-18.
- 32) 平等通昭. タゴールの学園―我等のサンチニケタン. 印度学研究所 東京 アポロン社 (1972).
- 33) 稲津紀三. タゴール 生誕百年祭祈念論文集. タゴール記念会, 19-56, (1961).
- 34) 我妻和男. タゴール詩・思想・生涯. 麗澤大学出版会. (2006).
- 35) 鈴木大拙. タゴールにつきて思ふこと、タゴール 生誕百年祭祈念論文集. タゴール記念会, 3-10 (1961).
- 36) 高橋亮編著. ひと MAN Rabindranath Tagore ラビンドラナート・タゴール. 本の泉社 (2011).
- 37) Takahashi R. The Science, Philosophy and Bioethics of Gerontology: An Individual and Community Journey from Japan. LAMBERT Academic Publishing(2019).
- 38) Tagore R. Man, Andhra University Press,(1934).
- 39) Tagore R.Man, Rupa,(2002).
- 40) The Calcutta Municipal Corporation. The Calcutta Municipal Gazette Tagore Memorial Supplement,(1941).
- 41) Murty DVS.N. The Great Man I have Come Across, Journal of Gerontology Renaissance2010;;2,17-22.
- 42) Chakrabarti M. Rabindranath Tagore and Gerontology:Aesthetic Perspectives, Journal of Gerontology Renaissance ジェロントロジールネッサンス 2009;1,49-56.
- 43) Katoch US. Rabindranath Tagore: An educational philosopher, Bharati Book Organization,(2007).
- 44) 松濤誠達. 人類の知的遺産 〈2〉ウパニシャットの哲人. 講談社(1980).
- 45) 高橋亮編著. ひと MAN Rabindranath Tagore ラビンドラナート・タゴール. 本の泉社 (2011).
- 46) 高橋亮. 「ひと MAN」の高価なる価値とその意義. Torch,Vol.081,書燈 140-142.
- 47) ウパニシャット. 日本ヴェーダ協会(2009).
- 48) 暁烏敏. 人, 中外出版 (1926).

- 49) 暁烏敏. 人. 崇信学舎(1950).
- 50) 暁烏敏. 人. 暁烏敏全集第 16 卷, 495-543(1976).
- 51) Metchnikoff & Mitchell. The Nature of Man: Studies in Optimistic Philosophy. Mitchell, P.C., Ed., New York: Putnam(1903).
- 52) 高橋亮. ヨガユニバーサルジェロントロジー共(教)育に向けての実践と展望:インド. Journal of Gerontology Renaissance ジェロントロジールネッサンス 2009, 1, 7-22.
- 53) Takahashi R & Shibata H. HSOA Journal of Gerontology & Geriatric Medicine, The Historical Philosophy of Gerontology in the Context of Our Future 2019, 1-26.
- 54) 柴田博. 日本老年社会科学会 50 周年を迎えて、日本老年社会科学 2009;31(1):76-77.
- 55) 高橋亮. ラビンドラナート・タゴール著作「MAN」との出会いとその意義:ジェロントロジー哲学の考察と今後の課題. Journal of Gerontology Renaissance ジェロントロジールネッサンス 2010, 2, 5-16.
- 56) 平林二郎. 日本人のスピリチュアリティー 仏教の視点から一. 異文化コミュニケーション学部紀要 2015; 7,165-181.
- 57) 高橋亮. 知的障害者およびその家族の生活の質 (Quality of Life) に関する研究—宗教を含む異なる文化背景の比較考察を通して—. 合同会社ジェロントロジーセンター (2011).
- 58) 暁烏敏. 霊界の偉人. 暁烏敏全集第 11 卷, 21-50(1976).
- 59) 暁烏敏. 死の問題. 暁烏敏全集第 11 卷, 205-265(1976).
- 60) 蠟山芳郎. タゴールと日本への警告. タゴール生誕百年祭記念論文集. タゴール記念会, 271-282(1961).
- 61) 暁烏敏・暉峻康範. タゴール翁を訪ふインド佛蹟巡拝. 暁烏敏全集, 第 23 卷, 90-95(1926).

## 註

- 註 1) 聴き取り石川県白山市明達寺住職暁烏照夫氏に暁烏敏翁について説明を受ける。戒名「こうそういんしやくしやうでん 香草院 釈 彰 敏 2019 (令和元) 年 8 月 1 日.
- 註 2) 2003(平成 15)年 4 月 7 日～5 月 30 日金沢大学資料館展示室 (付属図書館内) 没後五十年記念「暁烏敏展」目録 No.45「人」5 頁, 自筆原稿と図書. 原稿は和綴, 半紙版. 200 頁. 1926(大正 15)年 6 月. 『中外日報』8000 号を記念して企画された「八想録」の一. 越後東北旅行中, 講演やきごう揮毫の間をみて書かれた随筆集.
- 註 3) 聴き取り名城大学総務課岡本氏を介して森本達雄名誉教授に尋ねたところ Tagore: Man, 1937 年は、日本においては翻訳紹介が把握されていないということであった 2009(平成 21)年 6 月 23 日.

註 4) 2019(令和元)年のノーベル化学賞受賞者吉野彰<sup>よしのあきら</sup>(1948年生)は、過去・現在から未来が見えてくると述べている。学生 1-2 年生時代の経験は現在の研究にもつながっている。受賞が決まった九日夜の記者会見でも「歴史は単なる記憶の学問ではない。過去から現代に至る流れを読み取ることで、未来が見えてくる。研究開発においても面白いツールになる」と力説した。加えて栄誉を手にした理由の自己分析を問われ「関係ない分野も含め、できるだけ広い視野と関心を持つことが大事」と回答した。

## 謝辞

タゴール翁から暁烏敏氏へ贈られた自筆詩句や暁烏敏関連資料の閲覧及び暁烏文庫のご紹介を頂いた金沢大学図書館情報部商法サービス課・橋洋平課長に謝意を表したい。明達寺で詳しく御教示頂いた御住職・暁烏照夫ご夫妻に深謝したい。

The book titled "Men" by Haya Akegarasu and Rabindranath Tagore: A comparative study of Philosophy of Gerontology and future tasks

This paper is developing for Gerontology philosophy by finding out the common possible ground value from knowing what Man is. In this paper, we conducted a field survey in Andhra University in Visakhapatnam, India, where a lecture was addressed by Sir Tagore which was conducted along with literature studies of MAN, and a field survey in Kolkata and Santaniketan where Tagore lived. In addition to the 28th volume of Haya Akegarasu's research was proceeded at the Kanazawa University Library together with proof-of-research of related literature as a comparative study between Tagore's records and Akegarasu's diary, as well. What the author has learned from this study was individual has his/her own life philosophy. By learning each other we can develop our applied growing ability. Hat is main purpose of the Philosophy of Gerontology.

Key words:Akegarasu Haya Rabindranath Tagore Gerontology Philosophy

## おわりに

本冊子は本年 2020(令和 2)年柴田外記朝意の 350 回忌を祈念して 4 本の柴田町にかかわる論文をまとめたものである。これらの論文は故田代国次郎先生が開設された社会福祉研究センターより発刊されている「草の根福祉」からの原稿を抜粋したものである。その内容としては第一に「柴田外記朝意の 350 回忌を祈念して：柴田町の歴史文化と教育福祉に関する研究と課題」、第二に「古から学び未来へと向かう福祉の課題：「船岡」の歴史から学ぶ一考察 Going to the future is searching the past」、第三に「伊東七十郎重孝の武士道的生き方から学ぶ福祉の哲学の検討と課題」、そして第四に「暁烏敏とラビンドラナート・タゴールの著作「人」におけるジェロントロジー哲学の比較研究と今後の課題」である。自らを知るためには自らのルーツを知ることが「草の根福祉」の始まりである。自分の価値観が分かるほど自らの自信は、先祖があって自らが存在しているという理解に繋がってくる。筆者自らが家族歴史を探究することで母方の先祖が村田、白石市、柴田町に住んでいたことが分かった。仙台大学にあって田代国次郎先生の一番弟子である千葉喜久也先生とお会いすることが出来たのも田代国次郎先生からの恩恵である。また本大学を 1980 年に入学し二年間ボランティア休学を経て 1986 年に卒業して 2015 年に再び恩師若井彌一先生を通して母校で学ぶ機会を頂けた祝福に感謝している。そして今も尚恩師佐藤佑先生より在学生のもっている可能性の伸びしろを伸ばすように激励を受け、貴重な教えと資料をご教示頂ける特権に感謝をしている。仙台大学が船岡に開学した理由を調べると名称の仙台は、仙台圏を広くとらえたものであり、設立時からの創立者朴澤一郎先生の先見の明により、大学が体育学系以外の学部の増設も想定して、敢えて体育の文字挿入を控えた。朴沢泰治先生のリーダーシップの元現在では、体育学科、健康福祉学科、運動栄養学科、スポーツ情報メディア学科、現代武道学科そして、子ども運動教育学科という 6 学科が体育学部に集結している背景がある。仙台とは伊達政宗公が、1601（慶長 6）年に岩出山に城を構えていたところから仙台に城を移し、仙台への入城に当たって、「入りそめて国豊かなるみぎりとかや千代とかぎらじ仙台の松」と詠んだ和歌が始まりである。この仙台の命名の謂れは、唐の詩人の七言律詩「同題仙遊観」にある。紀元前 2 世紀に漢の文帝は、仙台といわれた「仙遊観」という壮大な宮殿を建造された。その素晴らしさを讃え、中国の伝説上の存在として知られた「仙境崑崙山こんろんさんの五城十二楼の宮殿」になぞらえた詩が詠まれた。漢の文帝は、黄河の支流にすむ仙人に国を治めるための教えを受け、都が完成すると町の西に位置する小高い山に仙人たちが集う複数の楼閣を築いた。すなわち「仙台」とは「仙人の住むような理想の国になるように」との熱い思いを託されたのである。即ち、仙台大学とは、「高い物見台に立って、仙人のごとく神業（新たな前例のないものを築きあげ）を得るために修行を積む教師と学生の集団」を養成するために努力することが筆者の使命とも考えている。柔道の哲学である柔の道は、日本の文化であり魂の象徴である。すなわちデキムス・ユニウス・ユウェナリス（Decimus Junius Juvenalis 60-128）は「健やかな身体に健やかな魂が願われるべきである」と記しており、これらすべてが嘉納治五郎先生(1860-1938)の唱える「精力善用」「自他共栄」に繋がるものと考えられる。柴田町の先人の皆様の優しさに囲まれて育てられ、「ひと」としての成長の可能性を与えてくれる地で学ばせて頂いていることに対して心から感謝をして本稿の結びとする。

筆者